
転生人生【極悪ノ道化】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生人生 【極悪ノ道化】

【Nコード】

N5631N

【作者名】

シュマ

【あらすじ】

ハンター世界に舞い降りた悪魔

彼はどう動くのか！

そんなに壮大ではないが原作をブレイクしていきます

悪魔と（笑）とわんわんお（前書き）

こんなのを見つけたあなたに感謝を

悪魔と（笑）とわんわんお

血と硝煙の匂いが立ち込める室内で、俺は一人ぼっちだった。

正確には俺が四肢をぶち抜いて翩った男がいるのだがそろそろ死ぬと思うので気にしないことにする。

なにやらうめき声で言っているが、聞き流す聞いてやるほど俺は優しくないのだ。

そういえばこいつらのせいだなと考え部屋の隅で血溜まりに沈む男と俺の足下で呻いている男を見下した。

俺の名前はヒソカ・七歳だ。前世では学生をしており受験まじかの高校三年生だった。

みなさんお気づきの通り、そう転生である。テンプレと少しずつれた感はないが、事故死だ。

死んだあの日、バスで帰宅途中の俺はバスジャックにあった。バスに乗っていたのは18人・俺と犯人と運転手、うちの学校の柄の

悪い三年男子五人と
三年女子二人、犯人に向かっていった後輩男子四人と後輩女子三人
に女性が一人だ。

あのバスジャックで死んだのは、17人・犯人と向かっていった
四人と見ていた12人で、運転手は隙をみて脱出していった。

バスはそのままガソリンスタンドに突っ込んで乗っていた人は死
亡したと……で転生したらしい。

何故らしいかというのは、今回俺を襲った奴が神様にあつてそう
聞かされたと言っている。

俺の足元で死にかけてるのが、神様にあつた奴だ。なんでも犯人
に向かっていったメンバーは能力を貰ってトリップしてきたそうだ。

そして隅に転がっている死体はあの犯人である。なんだか知らん
が神様がついでに送ってきたらしい……まあこいつのお陰で助かつ
た。

俺が家で内職（転生先は貧乏なのだ。）をしていると突然笑いな
がら突っ込んできたのだ。こいつの後ろからきたトリッパーとこい
つに弾丸を浴びせ（こいつは胸に、トリッパーは腕に掠った。）と
っさに隣の部屋に飛び込んだ。

俺が飛び込む寸前、こいつの身体とさっきまで俺が立っていたところが裂けた。

壁に何かがぶつかる音と俺が構えるのとトリッパーがやってくるのはほぼ同時だった。

俺がこいつらがここに来るのが予想外だったように、こいつらもおれがここまでやれるとは思わなかったようだ。

・念能力《伸縮自在な愛・バンジーガム》を床に張り踏んで隙ができたところで足を打つ！！

トリッパーの最後の攻撃・倒れながらも襲ってきた。その手に持つ刃物（短刀かな？）ではなく腕をバンジーガムで絡みとり、弾丸を腕に打ち込み相手の持っていた刃物で、四肢の腱を切った。

何故こつも上手くいったのか？…それは幾つかの条件の上で起きた必然、偶然が重なった結果だった。

まず俺がヒソカそのものではなく転生者で念能力が使えたこと。

トリッパーじゃなくてこいつが先行してたこと。

二人とも完全に油断してたことやこいつが能力者で無かったり、トリッパーが近接能力（トリッパーの野郎《直死の魔眼》なんて物騒なものだった。）だったこと

家が貧乏で中が薄暗かったりと俺に凄く有利だった。

「さてと、何か言い残すことはあるかい？トリッパー君。」

足元の彼は、口を震わせた。

「た、助けてくれ…。」

その声に力は無かった。

「ダメだよ。君は俺を殺しに来たんだ。」

彼はやっぱりかと呟いた後に

「化け物め……。」「といった。

「化け物？……違う俺は、悪魔だあ。」

と俺が言ったら

彼は、あ、悪魔たんと言って笑った後、俺に殺してくれと頼んできた。

「いいよ。」と俺は言つて一思いに喉を切り裂いた。

SIDEトリッパー

俺を見下ろしているガキがいる。

そのガキは恐ろしいほどの判断力と身が凍え死ぬようなそんな冷たい眼をしていた。

そのガキはこの狂った《HUNTER×HUNTER》の世界で重要な位置にいるヒソカという少年で転生者だった。

俺がすべて情報を吐き出すと彼は困ったようになんでそこまで話すのかと聞いてきた。

俺は死にたかったと言ってやった。能力のせいで狂いそうだったと、でも死ぬ勇気もなかったと

彼が遠回しに心の準備ができたか聞いてきてもうちょっとだけ話したい僕も遠回しに言うつと断られてしまった。

やっぱり、彼は厳しく優しい、僕がズルズルと先延ばしにしようとするまると先生のように諭してきた。

僕が言ったネタにも乗ってくれた。僕はそれが可笑しくおかしくて笑ってしまった。

僕は彼の後ろ姿をみながら - 友達になりたかったとか - 彼はニコ厨かなとか - あの三人は浅かったな - とか

無性になきたくなった。

考えるんじゃないかった。

SIDEトリッパーEND

珍獣・怪獣

財宝・秘宝

魔境・秘境

《未知》という言葉が放つ魔力

その力に魅せられた奴らがいる

人は彼等をハンターと呼ぶ

そしてプロハンターの必須技能《念能力》その可能性は限りない

そんなものが跋扈するハンター世界

オリ主たちは生き残れるのか全員出られるのか

悪魔と（笑）とわんわんお（後書き）

読んでくれたあなたに感謝を

なんかわかりずらくなってしまいました

そのうち改編します

八年目の原作（前書き）

ちょっと飛んでフラグ立てと不定期過ぎる更新ですみません

八年目の原作

どうもヒソカです。八歳になりました。ええ、前回犯人（バスジャックの犯人）とトリッパーが襲ってきってから一年です。

今回ついに！原作キャラと会えました。いやまさか、天空闘技場で生活費を稼ぎつつ、原作を待とうとしたら、飛行船で隣に座ってたんですよ。

誰かと言うと……モタリケさんです！なんですか？ゾルディック家とかジンとかビスケとでも思ってたんですか？甘いですが、そんなことしたら他の転生者に気づかれるでしょう！

「どうしたんだ？ヒソカ具合でもわるいのか？」

「いや、大丈夫だよ。モタリケこそ顔青いよ。」

「情けないが、船酔いしたよ。俺は寝てるけど、何かあったら起こしてくれ。」

「ああ、ゆつくりしてて。」

モタリケ…いい人なんですけど、此処がハンター世界だったのがいけなかったみたいです。あと色々一年でわかったんですが、どうやら世界の修正力？みたいなのがあって、すごい戦いたいです。ホモっけは無いのが救いですね。で、原作の人達と戦ってみたいので、ヒソカっぽい口調と動きの演技をしています。

それで前回のトリッパーの情報を信じるなら、彼の能力は直死の魔眼で能力をくれたのは神（若い美青年らしい）で、神の目的は狩り、つまり転生者を世界に入れてから自らの手で狩ること、だから

17人を殺したのは、神だった。犯人の精神を誘導して、転生者をつくるらしいことを神本人が、トリップさせる前に宣言したらしい。

で四人で考えて、神をその場で殺そうとした。だけど、考えてもみろ、おかしいだろ？わざわざ四人にましてや能力を決める前にいうなんてさ。案の定、罠だった訳だ、あの直死もちのトリッパーに能力が暴走するように細工してあった。結果、四人の内一人が死に、一人が神に操られ、二人はちりじりになったということだ。

あいつが笑って死んだわけは、やっと呪縛が解けたからだった。死んだトリッパーの能力は《属性を操る程度の能力》らしい、これで狂性を与えたから、今は神の思考力がかなり落ちてる。あの犯人は、その影響が出ててだから笑ってる。他の…

「……………」プルプルッ

「モタリケ…はい袋。」

「あつありがと。」エロエロー

モタリケのせいで話が折られたけど、他のトリッパーの能力は会えたら説明することにする。

まあ、彼からの情報はこれくらいだね。できれば、敵？をとって上げたいところだけでもう念能力出来てるし、うん他の人に任せようかな。

とりあえず今後の方向性としては、まずヒソカとして生きる。それから、折をみて他の人と接触してできれば神とやらを倒すでいいかな。

そろそろ、目的地に着くから、モタリケを起こそう。

「モタリケもうそろそろ着くつて。」

side モタリケ

俺はしがない運び屋のモタリケだ。今日も荷物を運ぶため飛行船に乗り込んだ。運び屋としては乗り物に酔いやすいのは致命的な気がしないでもない。

それでだ、俺はアマチュアハンターで念も少しは出来る。だから後から乗り込んできた子供が念能力者で俺より遥かに強いってわかった。最初は関らないようにしてたんだが、故郷にいる弟達を思い出して声をかけてしまったんだ。

「どうしたんだ坊主飛行船は初めてか？」

「ええ、初めてなんでドキドキしてます。」

青い髪の少年は、ちょっと緊張してたみたいで話しかけられてホツとしたように見える。

それで自己紹介を兼ねつつ、少年を探ってたんだが、こいつ普通にいい奴だ。無意識か分からんが要所要所に気遣いが入っている。老人に席を譲ったり、子供が走り回っていたらそれとなく注意する。そんなことする奴は始めて見たぜ。

「俺はモタリケって言うんだが、親御さんはいないのか？」

「ボクはヒソカです。自由気ままな一人旅ですよ。」

「……。」

「どうしたんですか？」

「敬語はやめてくれ体がムズ痒くてしょうがない。」

「えっと、じゃあモタリケ、これでいい？」

「ああ、それでいい。じゃあ俺はいくから。」

こいつ話してみると隙が全く無いな、これならほつといても大丈夫そうだな。さてと喫煙所にいくかな。

「なあ、何でついてくるんだ？」

「モタリケの後について行ったら色々と便利そうだなと。」

こいつ…腹黒！話しかけたのは間違いだったか。ヒソカの野郎、俺にパラサイトする気かそうはさせんぞ！

「なあ、ヒソカ俺は仕事があるから、オマエに付き合ってられないんだ。」

「大丈夫、勝手に憑いてくから。」

「金は出さんぞ！」

「だから勝手に憑いてくっていつてるだろ。」

だめだ、説得失敗した。力づくでとめようとしたら逆にやられるに決まってるし、どうしようもない。あとついてくって発音がおかしい気がするぞ。まあいい、ヒソカなら自分で何とかしそうだかな。

「わかった、好きにしてくれ。」

「いきなり、折れた！」

「その代わり、俺に念をおしえてくれよ。」

「うーん、別にいいですよ。」

それにしても、ヒソカは何でそんなに強いのが不思議だ。

八年目の原作（後書き）

読んでくれてありがとうございます。この話はご都合主義につきこの後、フラグが回収し切れない可能性が大了。最後にこの話は私の妄想なので是非原作で目立たない人が目立ちます。

運び屋モタリケと少女と乱入者（前書き）

更に、飛びます。空白の時間はそのうち外伝とかしたいです。どうも思ったように人を動かせません。

運び屋モタリケと少女と乱入者

side モタリケ

どうしてこうなった！後ろから迫りくる巨大な獣が俺達に飛び掛る。

「モタリケさん！」

「これは死んだかな？（モタリケが）」

「（あつ俺、死んだわ。）」

俺の逃げる先にいる、少年と少女の声を聞きながら。俺は諦めた。

数時間前、おれとヒソカはザバン市から北にしばらく行つたところにある。キボウ港という裏では盗品やらご禁制の物が出回る流通ルートのと要と言えるところだ。つまり、ここには仕事が溢れてる。十老頭の誰だか忘れたが、此処を仕切っていて治安もまあまあいいが、此処で気をつけるのは此処のトップの奴の部下と警察だ。此処の警察は腐っている。もうぐちゃぐちゃになっていて、どちらかという十老頭が抱き込んだ、警察が犯罪者だ。

「ねえ、モタリケちょっと闇市見に行ってるから。」

「ああ、別にいいけど。問題に巻き込まれんなよ。」

「モタリケこそ気をつけなよ。」

身長が殆ど同じになった（俺が170ちょいでヒソカが160後半だ）ヒソカが市場に向かって歩いていく、ヒソカに有ってから5年位か、速いもんだな。この5年で念がだいぶ強くなったが、あつたばかりのヒソカにはまだまだ届かない。荷物を抱えて裏路地に入り、臭い道をかなり歩いたところに目的地はある。

「（shopジエームス：ジエームス元気かなあ。）」

「誰だ？」

「俺だ、モタリケだ。例の荷物を持ってきた。」

ジエームスの店は珍しい物を捌いている。たとえば、神字の本であつたり、念の籠った美術品でだったりする。ジエームスの依頼は千耳会を通してでしか受けられない。ある一定の信用と念関しての知識が必要らしい、俺が受けるまでは荷物に被害が出てたらしい。俺は逃げ足が速くなんだかんだって荷物は届くので信頼性が高いらしい。なぜ、らしいのかというとヒソカから聞いたからだ。

「（にしても、ヒソカと仕事をしてから楽になった。ヒソカには並みの相手じゃ敵わないし、俺も修行をつけてもらった御蔭で、さらに逃げ足が向上した。ヒソカには感謝だな。）」

「じゃあ、荷物は確認し終わつたから、報酬は口座に入れておくぞ。」

「わかった。」

「あと、いま犬が市場にいるから、行くなら気をつけろよ。」

ジエームスが言った、犬は警察のこと。つまり今、闇市付近で暴れまわっている。普段なら近ずきもしないのだが、あそこにはヒソカがいる。最近、ヒソカの奴バトルジャンキーと化してるから、警察とかコミュニティ（十老頭の部下）に喧嘩を売りかねん。急がねば！

side change ヒソカ

適当に金をスリから巻き上げながら、市を見て回る。ここには、なかなか面白い物が出回ってる。食べ物、衣服、武器や麻薬等様々だ。だけど、奴隷やらの人身販売、高価な盗品は裏でも奥のほうに行かないと出会えない。

「今は犬はブルックス通りから此方に来ているそうだ。他にはダービーがかなりの大物を運んでいて、ハンスの店に面白い物が入荷されたらしい。」

「それで。」

「1000ジェニーだ。」

「……。」スッ

「グリードアイランドだ。買い手はまだらしいが、欲しいなら今の内だ。」

「じゃあね。」

「フフ、また御贖目に。」

情報屋のプッチにそういつて出る。プッチは自分が気に入った奴にしか情報をくれないし、ボクがあつたのも偶然だった。グリードアイランドか…ここでとれるならモタリケとは、これでお別れかな？

「（ハンスの店はどこかなっ）んっ？携帯だ。モタリケからか…へいへいど「ヒソカ！たすけてくれ！今俺は、『ガシャン！』ツーツー」はあ？」

携帯が切れた…どうやら、騒ぎに首をつっこんだらしいな。今度は何にに關つたんだ？コミュニティーのブツでもかっぱらったか？

サイレンの音が聞こえたから警察かな、自分で問題起こしてたら世話ねえな。

「警察は、ブルックス通りだったかな？」

ビンゴ！こつちのようだ。店のガラスが割れてるさっきの音はこれか…あつモタリケの携帯が落ちてる。さてなにがあったのかな？ちよつと誰かに聞いてみるか

「すみません、ここで何があったんですか？」

「っ！なんだ、子供か。いやな、犬がダービーのところに噛み付いてよ、モタリケをダービーの娘が巻き込んで二人で逃げてった所よ。いや、あの嬢ちゃんやるねえ。」

「（何してんだか…）ありがとう、それ買うよ。」

「まいど！あとダービーの車の方には行くなよ。まだ犬がいるからな。」

露天商のオヤジから卵を買うと、すこしげんなりした気分で、モタリケを追うために近くにあったパトカーを借りることにした。コミュニケーションに比べ撒けばいいので楽かな？通りから出ると銃声が聞こえた。

「（いたいた…警察はあそこか）轢き逃げダイナミック！！」

「ヒソカ！？」

「さつさと乗って！そつちの子も。」

なんとか、ジェームスの店に行けた。パトカーは乗り捨てた。さてなにがあったやら……モタリケに聞かないとな。

「全く何やってんだか。」

「すまねえ、助かったぜ。」

「…で何があっただ？」

「いや、ヒソカを探してたらこの子に巻き込まれた。」

あつさりというが、ぜんぜん情報が伝わってこない。ホントに巻き込まれたみたいだな。

「お嬢さんの名前は？」

「レルート。レルート・ダービーです。このオジサンが勝手に連れて行っただけです。」

「ちよっ!？」

「（なるほど、悪女になりそうだ。）モタリケー何してんの？」

「ちっ違う、拉致されてるのかと思って身内を装ったら、相手が警察で…。」

いや、ホント何してんの？モタリケ、そういえばダービーの娘ってことは大物が何か知っているのかな？

「ねえ、レルート。レルートはお父さんの運んでいた荷物のこと何か知ってるの？」

「…聞いてどうするんですか。」

「単に興味があるだけだよ。」

「《ブラットコート》です。まだ若いですけど。」

「えーと、それはまじなの？」

「まじです。」

《ブラットコート》それは、ハウンドウルフと呼ばれる。大型の肉食獣でとても深い深雪の森林の奥地に極少数で存在する。第B級

危険生物に登録されていて、知性が高くそれでいて残忍だという。
『ダービーの車の方には行くなよ。まだ犬がいるからな』もしかして、ヤバイ？

運び屋モタリケと少女と乱入者（後書き）

3〜4話は前後編です。みんなレルトのこと覚えていますか？
可愛いですよ。私は結構脇役が好きなんで他では見ない人を出したいですね。モタリケの念能力は乗り物酔いをしないのと乗り物に乗ったときに乗り物を強化する《運び屋伝説・ワイルドレーサー》です。地味に役に立ちます。でもきつと空気、ちなみにモタリケは放出系です。

運び屋モタリケと少女と乱入者 後編

side レポート

わたしのお父さんは運び屋です。いつもは細々とした依頼を受けていますが今回は大口の仕事でなんと！かの有名な暗殺一家ゾルデイック家のペットの輸送です。ペットといってもそんな可愛い物ではありません。化け物です。餌をやるのに特殊な檻に入ったこいつにスコップで投げ入れます。

「くくくつ、何か高そうな物を運んでいるじゃないか。」

「そうだな、なあダービーこれは調べないといけないな。」

「それとも、通行料でも払うかい？」

でも蛆虫どもに集られ、お父さんは負傷し、私は危なく連れ去られようとしたところにモタリケさんに助けられ、モタリケさんの仲間？のヒソカさんに荷物を聞かれ慌てているのを見ていたら、二人共どこかに行ってしまったのでお父さんのところへ行こうとしたら

「ガロロロロロロっ！！」

「ナン・・・ダト・・・！」

うちの荷物が此方を見ていて、驚いていたら横からバイクに乗ったモタリケさんに抱えられ、離脱できたと思ったら、すごい速さで荷物が追いついてきて、また引っ張られたと思ったら今度はヒソカさんの腕の中で何がなんだかでも一つだけ分かることがある。

「モタリケさん！」

「これは死んだかな？（モタリケが）」

「（あつ俺、死んだわ。）」

モタリケさん、さよなら

でもそうはならなくて、乾いたパンツで音と鈍い音、後から聞こえた泣き声どうやらモタリケさんは助かったらしい、見知らぬ青年がさつきまで荷物がいたところに立っていた。それから私はお父さんを見つけ荷物を回収し、三人と別れて船に乗った。

「もう疲れた：色々ありすぎて付いていけない。」

寝る前に思っけれど、また会えるかな？あつたら御礼を言わなくちゃね。

side change ヒソカ

そいつが現れたのは唐突だった。ボクたちがちまちま囷になって港から引き離そうと（ボクはそのまま戦った方が良いつて言っただけどモタリケは…）して狼？が止まってどこかを見ていてその先をみたらレルートがいて、ボクがレルートを確保しても時は既に時間切れ、ボクが卵を投げるもモタリケのバイクを切り裂いて、あわやモタリケエになると思ったら、そこにいた。

気がついたらそこにいて、その手に持った釣竿の糸で狼？の首を括り、近くの街灯に引っ掛け狼？の首吊りが実現した。どうやら釣竿全体に周がされているらしい、ボクはそいつと今すぐにでも戦い

たかった。でもとりあえずモタリケを助けてくれたことにお礼をいった。でも

「バスジャック以来だね。」

と返された。そいつが転生者なのはわかったがその返しはどうかと思う。たぶん恐怖で気絶したモタリケをジエームスのとくに連れて行って（レルトはそいつが送っていった。狼？を担いで）そいつを路地で待つことにした。

「待たせたな。」

「いや、別にいいよ。」

緩い笑みを浮かべた、そいつに即効でバンジーガムをつけ、こっちに引つ張り、堅で殴ったというところでボクの意識は闇に包まれた。

「起きたみたいだね。」

「…（拘束されてないし、敵じゃないか…話を有利に進めようと先手を打ったはずなのに、なにをされたのかすらわからないとは）。」

「君をのして22分だ。気分はどうだ？おれはマキオ、ジャポンから来た。前世の名前は佐久間修一だ。呼ぶときはマキオの方でな。」

「ボクは知っていると思うけど、ヒソカ、前世は竹中義人。」

佐久間修一、三年にいたな。文芸部に入っていて、本屋の息子、何で知ってるかというボクをオタクの人生に巻き込んだ文芸部の友人の格闘ゲームの師匠らしい重度の格ゲーマニアとのことだ。

「君はTSしてないみたいだね。」

「君はってことはしてるのがいるのか？」

「そうだね、おれは君を含めて11人と会っている。内三人がTSして、憑依が三人の内一人が君だ。」

それよりも気になることがある。何故此処にいたのか、タイミングよく現れることが出来たのかだ。

「マキオ、何故此処にいるんだ。」

「どうしたんだい？」

「ボクがここにいることをなんで知っている。あのタイミングは不自然だ。」

「…君はどれくらい知っている？此処が狩獵場だってことを。」

その後、活発な意見交換をし、かなりお互いの認識の差を埋めた。今、僕達が置かれている立場、危険性、原作との剥離についてなどだ。

「つまり、もう原作との剥離は始まっている筈だと。」

「補足しよう、君がヒソカに憑依している。これは立派な変化であり、予兆だどこかでズレが生じ、キメラアントの王の性格や強さが変わってもおかしくはないし、もっと強大で恐ろしい物がいてもいい。」

「このまま、放っておくと？」

「この世界の管理人の神は、トリッパーにより狂ってるぞ。それこそ愚問だね。」

僕達は深々とため息をついて、この先どうしていか考えを煮詰めることにした。その結果なにやら、重大なことやら面倒なことやらが発覚したが正直どうすれば良いやら、取り合えずマキオは普通

とは違う独特な人だとわかった。

運び屋モタリケと幼女と乱入者 後編（後書き）

モタリケエ……でした。きっと出番ないでしょう。レルートもない、次も速めに上げたいです。

読んで下さったかたに感謝を

閑話休題 モタレル（前書き）

閑話休題 モタレル

side モタリケ

「モタリケ社長！次の商談について幾つか相談があるのですが御時間宜しいでしょうか。」

「わかった、後で社長室に來なさい。」

「はい！では失礼します。」

若い男が離れていった。名前なんだったかな？うん、名札とか名刺をつくったら楽かな。

D & M運送会社、最近出来た会社で各地にいる。運び屋や運送会社を統合合併し、運送ルートの一歩化を掲げ、より安全より速くを実現した。マフィアコミュニティを後ろ盾にわずか数ヶ月の間で急成長し、十老頭でさえ迂闊に手が出せないようになっており、手を出すよりも素直に献金を受け取り不可侵を貫いた方が利益が大きく、そのために会社に協力する者もいる。このような仕組みを考え、作り上げたのは9歳の女の子だった。

「（俺が社長か：最初は小さかったんだがレルートに任せたら、こんな大会社に成るなんてな）なあ、レルート副社長。」

「何ですか、モタリケ社長。」

「別になんでもない。」

「なら仕事をしてください。まだまだ安定とはいいがたいんですから。」

よった勢いでやってしまったおかげで『責任取ってください』といわれ（勿論、レルートの親のデイベスとは、血反吐くほど殴られ

た）真面目に働こうとデイベスと運送会社を建て気がついたらレルートがコミュニティと交渉して協力させて、内心戦慄した。ヒソカにあつて以来だ、そういえばヒソカ元気かな？メールはするんだけど。ちなみにロリコン鬼畜社長として、両親や兄弟に罵倒されたときは泣いた。その後レルートに慰められてまた泣いた。嬉しくなんかないぞ！ただ自分が情けないなと思ったただけだ。ホントだよ。

side change レルート

モタリケ達と別れ、少ししてまたモタリケと再開することができた。高鳴る胸、これは恋！？モタリケは特別カッコいいわけでも、優秀なわけでもない、敢えて言うなら優しいかしら？それは置いて私は速攻で策を練ったは、結論は私に手を出させたらモタリケの事だから責任を取る筈だと、だから催淫剤と身体が元気になる薬を飲ませて、三日目にお酒を飲ませたら襲い掛かってきたわ。かなりしぶとかったわ、それから会社を大きくして置くと。

つまり、私はモタリケに子供に手を出すという罪悪感、大会社という責任で首輪をつくり逃げられないようにしたの。最近笑いかけてくれるから、心を許してるみたいよ。

「なあレルート副社長。」

「何ですか、モタリケ社長。（あとは子供をつくったら、もうモタリケは私のものね。フッフ、待っててねモタリケすぐに大きくなって貴方を満足させてみせるわ。）」

「別になんでもない。」

「なら仕事をしてください。まだまだ安定とはいいがたいんですから。」

そう私はいちやつけるくらい、私達がいなくても成り立つように
しないとね。

閑話休題 モタレル（後書き）

はい、五話はモタリケとレルートのその後です。原作との相違点は、モタリケはグリードアイランドに行かず社長に、レルートは捕まらず、精神科医にもならない。

レルートはヤンデレ異論は認める。

今後もちよいちよいこんな話を挟んでいきます。他に誰かクロロに憑依とかカメラアントに転生とかマイナーキャラ再構成とか書きませんかねえ。

電波少年の神様暗殺計画 前編（前書き）

こんなはずではなかった。なぜこんなキャラに。
はい、6話です。ヒソカ視点が多くなります。やっと主人公みたい
になったかな。

電波少年の神様暗殺計画 前編

side ヒソカ

やあ、第二回ヒソカレポートの時間だよ。一回目？二話のことだよ。今回はマキオとの会話で分かったことをまとめていくから、準備はいいできたかな？今回は原作との剥離の可能性のなしだったおさらいすると、まず神（この世界の管理人）が暇つぶしに来訪者（トリッパ、転生者、憑依者）をハンター世界に入れて狩りをしてた。今回は僕達17人が標的となった。尚、バスジャック犯は神の駒であつた。4人がトリッパに内、1人が死に、1人が精神操作されていた。マキオは11人とあつており、彼は12人の事を知っている。9人の転生者と3人の憑依者の内、3人がTSしていることをだ。合わせて17人のことがわかった。

次にボク達を不自然なタイミングで助けられたことだが、そのことは彼の猫（念獣のようで、彼の説明では探知系と思われる。）が教えてくれたといっているが、果たして此処まで正確に分かるだろうか？彼は強化系らしく、ボクを倒した能力と合わせるのなら難しいと思う、よって彼には以下の可能性がある。その1、かなり厳しい誓約をしている。その2、彼の念能力は念獣だけでボクを倒したのは違うもの。その3、ボクに嘘をついており、強化形ではない。その4、実は偶然で電波少年。その5、17人とは関係の無い介入者。その6、彼はトリッパだった。

上から考えてみるけど、その1は1番ありうるが難しいだろう。その2は前世は超能力者だったとかでこっちでも使える…無いなこ

れは無い。その3、これは具現化系とか操作系かな？これはある気がする。その4、これだったら考えても無駄だね。これだったらやるせないから無しの方で。その5、これだったら他にも来てる人がいるかも、でもあの神が見逃すか？その6、……無いな。まず姿が違うし、後輩でもないし、先輩だし、1番ないな。

結論、マキオすごい怪しい、というか怪しすぎて逆に怪しくない。これが証拠過多か…ちなみに今はマキオが発見保護した転生者とボクみたいに誘われた転生者が集まる場所に向かうため、飛行船に乗っている。そして、マキオは猫に向かって祈っている。あれは何なのだろうか？誓約に関係あるのだろうか。それとも、まさか実はその4が正解なのか…。

「ああ、死を祈ろう、死を讃えよ、死は幸いなり、死を誘うものよ、幸いの地へ誘っておくれ。ああ、生を祈ろう、生を捧げよ、生は禍なり、生を与えるものよ、禍の地へ堕しておくれ。ああ、導くものよ、あなたに感謝と憎悪を。ああ、照らすものよ、あなたに正と負を。」

マキオは邪神を信仰しているのだろうか？気にしたら負けだ。

結局、マキオは飛行船を降りるまで祈ったり、猫と話したりしていた。あんまり、話は出来なかったな。飛行船を降りたら、迎えが来ていた。金髪にスーツでスタイルが良い、美人さんだった。

「あつ！マキオさん、こっちですよ。あれ？こっちの方は誰ですか。」

「ヒソカっていう、まあ俺達の仲間だよ。」

「へー、そーなんですか。わたしスパーっていいいます。宜しくお

願います。」

「よろしく（まだ仲間じゃないんだけど、まあいいかな。）スパ
ーさんは、ハンターハンターのこと知らないの？」

「へえ？」

「彼は憑依者なんだよ。ヒソカは有名なキャラでね。」

「あゝ、私と同じですか。」

同じ？スパ―って原作にいたかな？えゝと覚えてないな。

「ヒソカ、スパ―ってのは、ハンター試験でイルミにやられちゃ
った人だよ。」

「そうなんです。殺されちゃうんです。マイナーキャラなんです。

」

「はあ。（なんか、イメージがどんどん変わる人だ。）」

「そうだねえ、可愛そうだね。よしよし、大丈夫だよ。」

「あわわー、慰められましたー。悔しいけど、嬉しいです！マキ
オさん、結婚して下さい。」

「だが、断る！」

「振られちゃいましたー。」

「「あはははー。」」

いや、ホント何なのこの人たち、電波と馬鹿女がいちゃついでる。

「スパ―、戻ったよって、またかよくやるよ。ホントにウザいつ
たらありやしない。なっあんたもそう思うだろ。」

「あなたは？」

「ああ、悪いな。俺はフランクっていうんだ！よろしく！」

「ボクはヒソカだよ。」

今度は、馬鹿そうだけど明るい感じがする。茶色い髪を立たせた

浅黒い肌の人好きのする兄ちゃんだった。正直まともそうではっきりしている。

「おい！マキオ、スパー！いちやついてないでサッサと車に乗るな。」

「はーい。」

「ボクはどこに乗ったらいいかな。」

「悪いことはいわねえ。助手席にしろ。」

「やっぱりか。」

フランクと二人でため息をついた。後ろの席であいつらはコントを続けている。すごいムカつくね、爆発しないかな？いやマジで。

電波少年の神様暗殺計画 前編（後書き）

中篇は、アジトからヒソカ視点からです。まだ、わたしが書きた
いとこまでいきません。困りました。

電波少年の神様暗殺計画 中編

side ヒソカ

みんなのピエロ（原作的な意味でかませ犬）ヒソカだよ。マキオとスパーの惚気を聞きながら、車に揺られ4時間やっと着いた。彼らのアジトの一つ、これあれだよ。幻影旅団のアジトだよ。なにしてんの！馬鹿なの！…どうやら此処をアジトの一つにしたのはマキオらしいもうアイツは何考えてるんだか。でメンバーにマキオの事を聞いたんだけど。

「マキオさんは、私が拉致されて、笑ってる人に殺されそうになったところを助けてくれたんです。恩人なんです。」と言ったのが色々残念なスパー

「いや、俺もたすけてもらったんだ。悪い奴じゃねんだが、ム力つくよなやつぱし。」と言ったのが笑顔が眩しいフランク、今度飲みに行こうと約束してる。

「悪い人じゃないんです。ただ、見せ付けなくてもイイじゃないですか…。悪い人じゃないですよ。ええ、ボクも助かりましたし、でも…。」と言ったのが、暗い顔でメイド服を着たメディア、彼女はTS転生で結構ひどいところで生まれたらしい。

「あいつのこと気にしてたら、日がくれっぞ。」と言ったのが、渋面で着流しのマサムネ
彼はジャポンに生まれ、独学で念を修め、気味が悪がれて捨てら

れたらしく、ドライな人だ。

「敵ではないのですから良いではないですか。」と言ったのが、メガネでイケメンなアデル、かなり良いとこの坊ちゃんに生まれ厳しく躰けられたらしい。

「……………恩人。」と言ったのが、ロリ体系のポンズ、3人目の憑依者でクリッとした目に茶色の猫毛で可愛い顔立ち、実家は養蜂家。

皆マキオに関しては恩義を感じてるみたいだけど、変人認定されている模様。あと他の転生者は念が使えなかったり、今の家族に愛着が湧いて、此処で普通に暮らしている。なので、ネットで情報のやり取り以外は殆ど干渉してないそう。トリッパの二人は偶に来るらしい。

「あの…マキオ、ポンズは何でボクを凝視しているんだい？」

「好きなんじゃないの？」「何で！」それより俺たちの今の問題であり、敵であるの神を倒す計画がある。」

「はい！それは何ですか？マキオさん。」

「いい質問だよ。スパー、後でジューズを奢ってやろう。計画はいたってシンプル！ただアイツを此処におびき寄せて、殺すこれだけだ。」

「オォー、流石マキオさん！」

何を言ってるんだろうか？それが出来たら苦労だろうに、おっフランクが質問するみたいだ。

「いや、無理だろ。」

「ふむ疑っているみたいだね。この中でアイツに襲われた、ある

いは攻撃されたものはてをあげてくれ。」

「何かあるのか？」

「上げてもらったら分かるよ。」

メディア以外全員が上げた、これが何かあるのだろうか？アデルは何か考え込むようにしている。

「君たちが最初に襲われたのは念を覚えて、少ししてからだ。念を覚えてない人は今のところアイツと遭遇していない、さらに念を覚えてから襲われるまでの時間とヨークシンから君たちが住んでいた所までの時間＋襲った後のインターバル一月で計算するとほぼ一致する。」

「つまり、次はメディアだといいたいのか？しかしメディアは念を覚えてからもう半月以上経つぞ。それは無いんじゃないか。」

アデルはそう言ったが、インターバルのことを忘れている。ボクは他の人が何時襲われたか分からないがボクは昨日襲われた（ダービー家にいちやもんをつけた警官に神の手先が居たらしい）ということは一ヶ月前に誰か襲われていたら

「クフフ、アデル。いいかい、昨日ヒソカはアイツに狙われた。」

一月前は、トリッパの片割れが狙われたそうだよ。ここはヨークシンの外れさ、4時間もあれば来れる。分かるかい？一月後、アイツは此处に来る。メディアを狙いにだ！」

「アイツが……来る……。」

穴は多いが可能性は十分にあるだろう。ここまで分かっているれば、戦力を固めやすいし、作戦も立てれる。いつもは不意を突かれていたが今度は分かっている。みんなはヤル気を漲らせてるね。それに

しても、すごいなマキオは電波ッぽいことや馬鹿なふりをしているが擬態だつてことが分かる。それでいて全員に信頼されている。あの擬態も彼の処世術の一つなのだろう。しかしポンスの目が血走っている、正直殺気が洩れた瞬間、洩れたかと思った、何がとは言わないが

「さて今後の方針も決まったことだし、夕食でも食べようか。」

「はい！マキオさん、今日はですね。クモワシのカツ丼とジャポンの味噌汁に漬物、人食いゼンマイのおひたしにポテトサラダですよ。」

「クフフ、スパーの手料理はいつも美味しそうだね。」

「有難う御座います！」

「あつははは！メディアも見習つたらどうだ。」

「五月蠅いよ。フランク、君はアデルを見習いな、口から溢すなよ。」

なんか行き成りすごいアットホームな空気になった。マキオ、スパー、フランク、メディアの騒がしい組みとボク、マサムネ、アデル、ポンス静かに食べるグループに自然と分かれた。いい雰囲気だこつちの世界に来てから、初めてかな…久しぶりに前世の故郷を思い出した。それとポテトサラダはマキオの好物だつてさ、羨ましいものだね。

電波少年の神様暗殺計画 中編（後書き）

次、戦闘です。さて誰を出そうかな？

電波少年の神様暗殺計画 後編

side ヒソカ

「はい！みんな、注目ー！」

神が来ると思われる日まで後1日となった。そんな中、朝食後にまったりとした空気を破ってマキオがみんなを呼んだ。なんだなんだと集まったら、見知らぬ人がいた。

「今回、神様暗殺計画に協力してくれる。トリツパーの大原真人おおはらまこと君です。みんな仲良くしてね。」

「はい！宜しく願います！」

「転校生かつ！」

「…真人。」

何故か学校つばい雰囲気になり、スパーが乗っかり、フランクが突っ込んだ。ポンスは真人の名前を呟いた。知り合いだったのか？その後、普通に馴染んだ真人は、周りからの質問に答え、楽しそうにしていた。彼が協力する理由を聞いたのだがボク以外は協力することになった。ボクは少し考えようと思う、先に僕達をこんな目に合わせたクソやろうに目に物見せないとね。

夜、夕食が終わり、いよいよ明日だと皆が気合を入れているとき、あいつが来たようだ。あいつの行動が読めていなければ、完全な不意打ち。あいつの行動を読んで、準備をしても、不意を討たれていた。

「どうやら来るみたいだね。皆寝ている場合じゃないよ。」

マキオが居なければだ。途端に発せられる念、マキオの足元の猫を中心とした円はこのアジトから遠くまで届くようだ。

「アイツの他に8人、正面から5人、裏から3人。よし！ヒソカとポンズは裏の三人に行くよ！他は広場であいづらを叩いて！」

マキオの指示に従って動く、俺とポンズはマキオの後ろに続いて窓から飛び出してゆく。

瓦礫を避けて進んでいくとマキオから止まるよう指示があった。どうやら、相手も気づいたようだ。見えた！ベレー帽の男と顔に刺青があり民族衣装を着た男、そして仮面を被った大柄な男だ。

「俺はベレー帽、ポンズは刺青、ヒソカは仮面だ。」

「わかったよ。」

「……。」 コクンッ

仮面の男が…強いといいなあ、まず牽制にカードを投げる。サクッと気持ちのいい音がした。

「外れみたいだね、つまらないな。」

バンジーガムを着け、凝をした拳で殴る。仮面ごと顔を碎き力エールが潰れたような音がし、男が崩れ落ちる。どうやら死んだようだ。二人の様子を見ると、刺青の男が出した人形を切り捨て、男を貫き、その身体で短刀を拭くポンズとベレー帽の投げたナイフが周りに弾かれ兆弾となったナイフをいなし、ベレー帽に近づくマキオと距離を取ろうとするも、攻撃を全ていなされ、ボディーにイイのを貰い

ベレー帽が倒れ、男に止めをさすマキオがいた。

ポンスのは明らかに直死の魔眼じゃないのか？後で聞かないとね。マキオ…君は純粋な武術だったんだね。勝てる気がしないね、でも興奮してきたよ。フッフ、君たちと戦いたいな。

side メディア

「どうやら来るみたいだね。皆寝ている場合じゃないよ。」

うわわわ、どつどつどつしよう！！ボクだけ戦えないんだけど、もしかして死んじゃう！？僕死んじゃうの！

「おい、メディア。お前は後ろで下がってな。」

「マサムネさん…分かりました！ボクは後ろから応援してます。」

「はあ、お前は昔からそうだよな。」

聞こえませんよ、ボクは危険ですから下がってますから頑張ってください。さて、下がったは良いけど下手をこいて見つかりたくありませんし、一人で行動して狙われたら目も当てられません。此処は一番強いマキオさんのところが正解ですね。多分…そうと決まれば裏口から出ると、それからマ「こんな所で何をしているのかな？アハハハハハハ！」ギャー、なんでこいつが此処に！

「貴様ら！動くな、こいつがどうなってもいいのかな？」

「メディア！？」

はい、捕まっちゃった。メディアです。あつ皆さん、敵（神を

除いた5人）を倒したんですね。スゴイデスネ、ボクが出て行ってから10分くらいですよ？一階のホールが血だらけですね、掃除が大変そうです。マサムネさん、血で濡れた貴方もカツコいいですよ、だからそんなに睨まないで下さい。え〜と、今ボクは140センチくらいしかないので、コイツは180センチ位ですかね？嫉ましいです。コイツの顔が見えません、ボクの顔はコイツの胸より下にありますから。

「アーハツハハハハ！これで終わりだな、残りの三人は強いぞ！それに私の潜在・顕在オーラは無限大だ！」

「…アイツ、厨二かよ。」

「ぷっ！」

「くつくく、止めてくれ。そんなこと言われたら腹がよじれるよ。」

「うわわわ！何このオーラ！ヤバイって何で皆笑ってんの！？誰か速く助けてよ！」

「貴様らあ！何故笑っている！よし死にたいのだな！殺してくれろ！」

「ぷくく、まあそんなに起こるなよ。神さん。」

「そうだな、短気は損気だぞ。」

「何故か親近感が湧いたよ。厨二病とかね、もう……限界が……」

「フランクさん！マサムネさんにアデルさんも笑ってないで助けてく！クフフ、教えて上げるよ。それは死亡フラグに入るって事をね。」
「ボクの顔に血飛沫がかかった。ボクの頭の上、神の胸、心臓の部分に先の尖った棒が出ていた。」

「うう、力が抜けていく。」

「俺の念獣は武器に成る事が出来てね。君は大きな穴の開いた袋のようにオーラが抜けていくだろ？分かるよね、今なら君は神の力を全く行使できないことを…ポンズ！」

「うぐぐう、だが此処で貴様を殺してしまえば！」

「ねえ…少しでも…生きたい」「ウギヤア！」？ふふふ…あなたでも…痛いと思うのかしら…？「や、やめてく」じゃあ…その証が欲しいのッ！「ひぐう！」泣いてっ！？「げええ」吼えてっ！？「ぎぎえ」呻いてっ！？「ううあ」叫んでっ！？「っあ」命乞イヲシテミセテッ！！」

マキオさんの御蔭で脱出できたと思ったら、ポンズさんがアイツの腕を断ち、足を？ぎ、腹を割き、骨を奪い、腸をぶちまけた。猟奇的なシーン、臓物の不快な臭い、ポンズさんの狂笑、全てが相まって絵画のように見えた。しかし私の意識はここで途切れてしまった。

電波少年の神様暗殺計画 後編（後書き）

能登さん怖いよ能登さん。はい、8話です。というわけであつさりと撃破、神様編？終了のお知らせ、ジョジョでいうと4部の形兆みたいなモンです。

格キヤラの念能力は次回に、そしてここまで読んで下さった方！ありがとうございます。

閑話休題 メディアの1日INアジト（前書き）

遂にベールを脱いだ転生者たち！はい、9話です。メディアはへたれっ子でファイナルアンサーです。メディアオンリーです。

閑話休題 メディアの1日INアジト

side メディア

ふああ、ベットのの上からおはようございます。ボクの一日はアジトで生活している皆を起こすことから始まります。

「皆さああーん！！おはようございまああーす！！」

「うるせー！！！！」

「死ねー！！！！！！」

いい声ですね、声が反響して響いています。調子がいいですね、次は朝ごはんを作っているはずのスパーさんを手伝いに行きます。スパーさんは美人で愛嬌が良くて料理も出来る、良妻賢母です。二階にある、ダイニングキッチンに行くとやっぱり、スパーさんとマキオさんがいました。

「おはようございます！マキオさん、スパーさん。」

「おはよう、メディア。」

「やあ、今日も元気だね。耳がキーンとしたよ。」

マキオさんはテーブルで新聞を見ていました。そういえば、ここって新聞って届くのかな？些細な疑問を抱きつつ、朝食の手伝いをします。手伝っていると皆が集まってきます。朝の目覚ましおはようございますに文句を言われたり、今日の予定等を話しながらの朝食が終わったら、お掃除です。このアジトも来たばかりに比べたら良くなりました。瓦礫だらけ、罅だらけだった。廃墟は、ゴミが無くなり、フローリングになりました。

掃除が終わる頃には、アジトにはボクとスパーさん、マキオさんくらいしかいません。まあ、偶に誰かいますが、それよりも、実はポonzさんTSしてたらしいです。死んで転生して操られて死んで転生してTSして復讐して、忙しい人ですね。現在はヒソカさんと行動しています。前世との性格の違いに真人さんは、戸惑っていました。私が私は分からなくも無いです。偶に夜になると、戦いの檄音が聞こえますから中は悪くないと思います。

前ははじめて念能力者の戦いを見たんですが、ポonzさんの暴れっぷりには驚きまして、なんていうか……その………恥ずかしいんですが……フフ………失禁しちゃいましたね……えっ？そこはお漏らしにした方がイイって……ってマキオさん！地の文を読まないで下さい！……小さく洩れていたと……まっまあ、そうですね。気にしないで今日も張り切って念の修行をしましょうか。

少女修行中

っふう、今日もいい汗かきました。私の修行はマキオさんかスパーさんが見てくれるのですが、助けられて五年、戦う決心を固めて一年半、ついに念を感じて一ヶ月、ようやくようやく発の修行に入ります！といってもまだまだ完成しませんが、発の参考に皆のを見せてもらいました。

マキオ&スパー『変形自在の愛獣　メタモルペット』といって二人で作ったものらしい。

能力は武器形態（槍型、銃型）と獣形態（猫型、大型猫型）に変われる。槍型は見た目は先の尖った六角の棒で、細長い杭みたい

に飾り気の無いもの、効果は吸収と放出らしくこの前はオーラが強すぎてすったそばから放出してたらしいです。銃型は見た目スナイパーライフルです。連射と単射で切り替えられて、弾は念弾です。効果は貫通と弾性で、スパーさんは自在に使いこなしていました。猫型は探知系で人をマーキングしたり、ソナーや聴音にサーモグラフィーまで出来るみたいです。大型猫型は大人二人くらいなら余裕で乗れそうです、移動用ですね。いやあ、すごい能力ですね。マキオさんは強化系、スパーさんは操作系で補って作ってるみたいです。

フランク 『暴君の大騒音 ジャイアンズリサイタル』とって声で攻撃する能力です。某アニメキャラを真似たそうですが、すごい強力です。声にオーラを乗せるんですが、距離・範囲は声が届く所まで、対象は任意で操作可で効果が三半規管にダメージを与える。戦闘補助としてはかなりチート染みてます。弱点はオーラの消費が大きいことと声を出せなくなったら使えないことです。放出系って戦いでかなり強いですよ。

マサムネ 『孤軍奮闘 ステゴロタイマン』とって一対一用の能力です。100m四方の空間で罠が設置してある部屋で戦うらしいです。部屋の中ではどちらも絶状態になります。もちろんマサムネさんは罠の位置を知っています。これを破ったのはマキオさんだけらしいです。マサムネさんは前世からすごい強い不良だったんですが、マキオさんは化け物ですね。

アデル 『極悪制圧軍隊 バットカンパニー』とってとあるスタンドのまんまです。でも規模は此方の方が大きいと思います。G・Iジョー人形みたいなのが大隊を組んでいます。歩兵、軍用車、戦車、戦闘機、戦闘ヘリ、空母まで出せます。一つ一つはそんなに強くは無いんですが、集団で来るので恐ろしいです。アデルさんは離れたところで使うそうなので使っている間は動けないという制約は

あまり効果ないですね。

真人は一方通行の能力で反射です。ベクトル操作です。何故短いかというと説明されても良く分かりませんでした。ヒソカさん、ポズさんは割愛しますね。こうしてみると皆さんチートですよ、羨ましいです。幸い転生者は総じて潜在オーラが多いので強くは成れるとのこと、死んだらやなんでゆっくり起こしたのがこの結果です。

「メディアちゃん、そろそろ夕飯作るから手伝ってね。」

「はい、分かりました！スパーさん。」

それにしても、マキオさんの技 シャオリ 消力でしたっけ前世の時からも
どきが出来たとかやっぱりあの人が一番チートですね。

閑話休題 メディアの1日INアジト（後書き）

マキ才は念獣をもぅ使いません、スパ―用です。そろそろ、うわをあわわに換えてもわかりませんよね？前書き、あとがきはスル―ですよ、普通は。

嵐の先触れ（前書き）

Q そんな話で大丈夫か？ A 大丈夫だ問題ない。はい10話です。
今回はVS旅団編の予告です。

嵐の先触れ

side ポンズ

部屋が静まり返っている。新たな問題が発生していたのだ。転生者のことが、幻影旅団にばれてしまった。トリッパの片方が神に襲撃された時、紛れていたのだクロロが…このことに気づいたのは捕まってしまった、トリッパ三浦俊祐が入院し、目覚めた時、念と記憶が無くなっていた。自分が誰か判らなくなった俊祐は今恐慌状態にある。

「神よりも危険な状態だね。あつちは少々頭が逝かれていたから読みやすかったんだけど。」

「マキオ、そんなに危険なのか？確かに念と記憶は強力だがよ、こつちには更にチート臭い能力だぞ。負けはしないんじゃないのか？」

「分かってないな、フランク。俊祐の念能力は『朱の王・キングクリムゾン』には時間を消し去るし、未来を予知できる『墓標・エピタフ』がついているんだ。それにクロロの能力は『盗賊の極意スキルハンター』で念能力を奪える。記憶を奪った能力も不明だ、大体俊祐は強い！」

「真人の言うとおりだよ。記憶というのは人の持つ情報の中でも未知の物だ、どこに在るのかも分からない。それを奪えるというのは非常に危険な能力だ。自分が何をされたのか、何者なのか分からなくする。クロロにとって最高の組合せ、俺たちにとっては最悪だね。アフターケアもバッチリさ。」

「マキオさん、僕達はクロロの正体を知っています。でもポンズさんの能力なら殺せると思うんですけど。」

「メディアは空の境界を読んだことあるかい？そのヒロインがポ
ンズと同じ能力なんだけど、未来予知の能力者と戦うんだけど、そ
いつは予知した未来にどうやってたどり着くか解る能力でそうなる
ように積み重ねるんだ行動をね。でもエピタフは違う確定した未来
を観るんだ、逆らうように動いてもその未来道理に動く、殺しても
確定してるんだよ。」

「つまり？」

「無敵。でも原作では敗れた。勝利する筈だった未来に辿り着け
なかったから。」

そう原作ではディアボロのスタンド・キングクリムゾンには負けた。
彼は永遠に未来に辿り付けなくなったから、でも此処にはゴールド・
エクスペリエンス・レクイエムは無い。念能力には限界がある、あ
の能力は人には再現できない出来るとすれば、キングクリムゾンを
くれた神だけだ。それをクロロは知っているだから危険なのだ。彼
はディアボロが求めた無敵を再現できる。勝てる可能性があるのは、
私の直死か真人の一方通行。

side クロロ

俺を悲しみと歡喜が包んでいる。この前偶然見つけた念能力者か
ら能力を盗んだとき、パクノダとイーノックが死んだ。パクはいつ
も俺を心配してくれていたし、イーノックは俺の無茶振りに大丈夫
だ問題ないと応えてくれた。三番と四番の欠員、殺したのは俊祐と
いう念能力者。でも殺さない、能力が消えてしまうから。憎しみで
動いたりはない、二人は俺の中で生きているのだから。俺の新しい
能力『旅の栞・ブックマーク』が有るから、旅団メンバーの二人
の力は俺が受け継いでいる。

仲間の死と俊祐の能力と記憶は俺を成長させた。俺は負けない誰にも、俺は逃げない二人が見ているのだから。クラピカは逃がさず殺す、クルタ族は残らず狩る。十老頭も始末する今はあいつらに使われているがこの手で殺す。グリードアイランドで念能力者を狩る、そして能力を奪う。皆はきつとついていくだろう、俺たちは止まらない。キメラアントの王も俺たちを止められはしない。

s i d e e n d

「クロロが壊れてぶつぶつ言ってる…。」

「きつとパクのことかきてるネ。ほっとしておくヨ。」

「団長は繊細だから。」

「きつと部屋にいたら泣くと思うぜ。」

「賭ける力？」

「お前らは不謹慎だな。」

「あの三人相手に二人もぶつ殺すのか、俺がやりたかったぜ。」

「お前は突っ込んでいつて返り討ちだな。」

「あんだとお！」

「二人とも外でやってよ。埃が舞うだろ。」

「……………」

旅団での一幕、確実に変わった物語。頭は暴走し、手足は混乱する。すれ違う両者、悲しみを暮れる頭、死を慎む手足。潜在的に敵対する旅団、危険視する転生者組み。未来を紡ぐのはどちらか、静かに生き時を楽しむ方が、未来を知り力を得て奪い続けることを選ぶ方が。嵐の前の静けさ、戦いは近い。

嵐の先触れ（後書き）

転生組みの会議、ポンス視点です。他にも詰め込もうかな？とか思いましたがやめました。旅団では温度差が酷いです。クロ口は当事者なので冷静じゃありませんが、メンバーは団長が気にしすぎているので逆に気を使っています。ジョジョ好きには申し訳ないんですが、自分なりの考えでスタンドを使いますので、原作より鬼畜または弱体化しているとおもいます。最後に、サーレーはもっと強いはず！

決戦前

side クラピカ

今、村にはマキオさんたちが来ています。彼らは村の民芸品と交換で生活趣向品と変えてくれる。クルタ族が作っているネフト織物はそれなりの価値を持つようで、此方に有利なように交換してくれるから僕が作ったのでも交換してくれる。どうやら村の外の人は目が赤くならないみたい、僕達は興奮したり、集中している時は赤くなります。僕達の作るネフト織りは不思議な力が宿っていて、色々と便利だそうです。

「マキオさん！今日はどんな漫画を持ってきたんですか？」

「ああ、クラピカか。今日はね、剣風伝奇狂戦士に最初の一步を持ってきたよ。」

「剣風伝奇狂戦士ですか？」

「お勧めだよ、でもクラピカにはまだ早いかな？」

「もうボクは13歳だからいいんです！」

まったくマキオさんはすぐ子ども扱いする。それにしても今回は人が多いです。いつもはマキオさん、スパーさん、フランクさん、マサムネさんくらいで、アデルさんやメディアさん、ポンズさん、ヒソカさん、真人さんは初めてですね。マキオさんとスパーさんは村の人や子供とよく話していて、みんなと馴染んでいます。フランクさんは女性をナンパしてます。マサムネさんは道場でクルタ族に伝わる二刀流を習う傍ら、ジャポンの剣術を指南してくれます。

クルタ族の村か、ここにも転生者がいるとはねえ。トエトだった？まあ、小心者で戦いとは無縁で全く興味が湧かないね、でもマキオは知っていたか。近くの街でコンピュータでマキオが開設したサイトに助けを求められて、マキオは助けることにした。それってもともと旅団とやり合うつもりだったのかな？

「ねえ、ヒソカ。」

「なんだい、ポンズ。」

「ヒソカは戦うの？」

「勿論さ、戦いたかったし、それにこのメンバーなら死ぬ危険が低いから。でもクロロがキングクリムゾンを持ってるなら、他のメンバーかな。」

「結局、クロロは真人が担当するもんね。」

ホント残念だよ。彼が泣き叫んで命乞いをする姿が見たかったんだけど…想像がつかないな。本当に残念だよ、真人のベクトルを操作する能力で勝てるかな。そこが問題だけど、気にしたら負けだね。僕はまだポンズどころか、マキオにも勝てないからね。……あれ？どっちが強いのかな。

「ポンズ、一つ聞いていいかい。」

「何？」

「君とマキオはどっちが強いのかな？」

「マキオよ、どこを切ろうとしても見切られるし、切ったと思ったら流されるから。ありえないわよねえ、魔眼使ってるのに避けられるとかねえ？」

マキオはそんなに強かったのかい？どうやら彼には何か秘密があ

るみたいだね。

side change シャルナーク

団長が前と違う、パクノダ達が死んでから変わってしまった。団長にかぎって仲間が死んだからって自暴自棄になる筈がない。死にたいがために進むのではなく、もっとこう危険な感じだ。そう、油断だ！己が圧倒的優位に立っているという慢心！しかしあの団長がそこまで自信を持っているとは凄い能力を得たのだろうか？いったいなんだろうか？今までだって団長は強かった。浮き足立ってしまふほどの能力………わからない。

「シャル、どうかした？」

「マチか、なんでもないよ。考え事をしていただけさ。」

「そう……シャル、あなたは今回の緋の目狩りどう思う？」

「んゝそうだね、団長の好奇心をくすぐったんじゃないかな。」

「私は嫌な予感がするよ。」

マチの感が危険を感じている？マチの感はよく当たる、何度も危機を救ってくれた感だ。クルタ族にはなにかあるのか？実際に仕事に入る前から命の危機を感じているのか。団長の油断、マチの感……どうも今回は旗色が悪いね。パスするか。

「マチ、俺は今回は抜けさせてもらおうよ。調べたいことがあるからね。」

「調べたいこと？」

「そッ調べたいことがね。」

パク達がどうやってやられたのか、誰にやられたのか、団長がなんの能力を得たのか知りたいしね。え〜と、まずは最近の事件を探して、ハンターサイトかな？彼に連絡をとってもいいな。よしそうしよう！番号は……あつたこれだ！

『はい俺です。』

「あつ、オレオレ！シャルナークだよ。」

『シャルナーク？…ああ！ハンター試験の、どうしたんだい急に連絡してきて。』

「うん、相談したいことがあつてね。今どこにいるの？」

『今ね、ネフト村で狩りの準備してる。でも明日ヨークシンで仕事があるから会えるよ。』

「狩り？何を狩るんだい？」

『幻影旅団っていう奴。』

「へ、へーそーなのかー。明日、うん明日会おうか。」

『わかった、じゃあ何かあれば連絡してくれ。』

なななんではれてんの！畏か、畏なのか！お落ち着け、クールになれ、K O O Lになれて駄目だ！考えが纏まらない。彼は俺が旅団員だつて知らない筈だ。これは逆にチャンスなのか？いや、よく考える！団長は油断しているんだぞ！このまま行ったら彼に喰われるか？しかし団長がこれを知った上での態度なら…いや危ない橋は渡れない。今にも壊れそうな橋を渡る奴はそうそういない、渡のは相当な馬鹿かイカレテル奴だけだ。メンバーに話すのは危険だ。団長が何を考えているのかさっぱりだし、裏切り者にされるかも知れない、皆が生きて帰ってきたら接触しよう。

「シャル、どうしたの？」

「いや、明日はヨークシンにいつて友人に会おうかと思ってね。」

「それって前に言っていた面白い奴のこと？」

「そうだけど？」

「シャル、私も付いて行くわ。」

「えっ！」

決戦前日

side マチ

パク達が死んで、団長は変わってしまった。クロロ、貴方は気づいている？クロロが嫌っていた、故郷の老人達と同じ顔をしていることに。老害と蔑んでいた、人たちと同じ顔だ。自己保身に余念がなくて、保守的で古い考え、力に溺れた人たちって言っていた。ねえ、クロロその自信はどこから出てくるの？

ヨークシン、マキオたちのアジト

シャルナークが挙動不審で気になってついてきたら。捕まってしまった、これは何の冗談なのだろうか？友人同士のじゃれ合い？

「悪いね、シャル。すまないが此処で君らはリタイヤだ。」

「マキオ、これは一体何なんだ！？」

「君なら俺に連絡すると思っていたよ。しかしお嬢さんまで連れてくるとは予想外だったけどね。」

「それじゃ、昨日わざわざ情報を流したのは俺を誘導するためなのか？」

「まあまあ、そんなに落ち込まないで15歳でそこまで考えるのはそうはいないから。」

「…誘導しやすかった？」

「淒く！」

なぜか、漫才が始まっているがどうしたらいいのだろうか？もう嫌だ！クロロは人の話を聞かないで話を進めるし、ウヴオとかフ

インクスとかフェイタンとかは戦いたいだけだし、ノブナガやフランクリンだってあっちよりだし、押さえ役のパク達は死んだし、最近入ってきた、ボノレノフって奴は不気味だし、ああ駄目だ。寝よう、寝たら全て終わってるかな？

人それを現実逃避という

side change アデル

夕飯時、ヨークシンで用事があつたに呼ばれ、私はアジトに行く
と旅団メンバーで現在敵である筈のシャルナークとマチがいた。目を白黒させていると奥からマキオが出てきた。

「マキオ君、これは一体何が？」

「アデルか、なに簡単なことだ。二人捕まえたから、見張ってて貰おうと思っただけ。」

「どうも、シャルナークです。シャルって呼んでもいいよ。」

「マチ…。」

「こちらこそ…マキオ君なんでこっちの子は体育座りで壁を向いているのかな。」

「俺が説明するよ。マチはパクが死んでから旅団のために骨を折っていたんだけど、今回マキオに捕まって今まで張り詰めていたのが無くなって、今の旅団について考え始めたらこうなった。詰まり現実から目を背けているので、そっとして置いて下さい。マチは頑張ったんです。あの濃いメンバーを一人でまとめたんですよ。」

シャル君はなにか力説してるけど、後ろの方が気になりますよ。
マチちゃんが壁の方で何かを呟いて殴り始めたけどいいのかな。私
がこの子たちの監視に選ばれたのは能力の相性からでしょう。とい

うことは私はネフト村で戦わなくていいのですか。楽ですね。

「ブツブツ……大体クロロもクロロよ……皆をほっというて何処か行くし……帰ってきたらやれ仕事だつて……ブツブツ……」

とりあえず、マチちゃんを落ち着かせてからですか。

side change マサムネ

夜になってから、マキオが帰ってきた。どうやら何かしてきたようだ、妙に機嫌がいい誰かをからかっていたのだろう。部屋に入ってきた時の全くブレのない歩法、一部の間のない佇まい、やはり凄いなマキオは此方にきてから武術を学んでから気づいた。どうやらマキオは決戦時の担当を決めるようだ。

「じゃあこれから誰が誰を担当するか決めるけど意見や要望はある？」

「マキオ、俺はノブナガと戦いたいぞ。」

「じゃ、ノブナガはマサムネね。他には？」

「俺に敵を、クロロをやらせてくれ！」

「真人はクロロつと他はないみたいだね。ヒソカとポンズはフェイタン、フィンクスをお願い。スパーはフランクリン、フランクはボノレノフ、ウヴォーは俺でメディアは村の人の避難を手伝いつつ皆の支援をお願いするよ。」

皆はまだ話し合っているが俺はノブナガと戦えることを楽しみにしている。別に人を殺すのが楽しいわけじゃなくて純粹に戦いが好きなんだ、バトルジャンキーっていうのか、今の目標はマキオだな。いくら念能力者には相性があるといっても実力差は大きい。いつか

マキオを越える武人に成ってみせる。

side change ヒソカ

フェイタンとフィックスか、楽しめそうだね。ポンスとなら心強い、気をつけるべきは廻天と許されざる者か、リップバー・サイクロトロンフェイタンはポンスが仕留めればいいし、フィックスは攻撃させなければいいから楽かな？能力が分かっているってのは大きなアドバンテージ、フッフ楽しみだよ。

「ヒソカ、気味が悪いよ。喜んでるのは分かるけどね、でもその顔はやめてね。」

「すまないね、ポンス。でもこの顔は生まれつきなんだよ。フッフ。」

「はあ。」

フッフ、溜め息なんてついちゃって、もう諦めたほうがいいよ。だんだんヒソカっぽくなってきたからね。ところで他の人は大丈夫なのかな？真人とかクロロに殺されちゃうんじゃないかな、ならばくらがやっても良いんだよね。楽しみだよ、本当にネ。

side change フランク

ちくしょー！！またナンパ失敗だ！クソ、周りはリア充ばかりでずるいぜ。俺なんか、俺なんか、おホモダチにしか好かれないいわ！マキオは元からだし、マサムネも道場の姉ちゃんといい感じだしよ。アデルはモテモテで、ヒソカの野郎はポンスちゃんと宜しくやってるし、チクシヨウこの恨みボノレノフで晴らすべし…。

「フランク、ちょっと頼みたいことがあるんだけどさ。」

「マキオか、なんかあったのか？」

「ああ、それでな……。」

ふー、しょうがないな。無い方がいいが何事も万が一があるからな。古参の俺がやるのが最善か？それよりもだ！大事なことがあったんだ。

「マキオ、大変なことがわかったぞ。」

「なんだ？」

「誰もナンパに付き合ってくれない。」

「そりゃ、此処は田舎だから、ホイホイ付いていくのがおかしいだろ。」

「後、クラピカは男だった。」

「まだ言ってたのか、フランクが好かれるのは男だけという悲しいジंकスがあるだろうに。残念だったな懷かれてたのに……。」

「チクシヨウ、俺も巨乳の姉ちゃんとイチャイチャしたいぜ。」

クソー、マキオめ。ナイスおっぱいをスパーといい仲だから余裕ぶりやがって羨ましい！あー何処かに落ちてないかな、おっぱい。この際、チッパイでもかまわん！一向にかまわん！…顔は悪くない筈なんだけどなあ。あつ！あんなところでメディアが修行してる、これは奴でストレス解消するしかない！ふふ、民家の裏でこつこつ修行とはな。

「あつ！フランクだ。ナンパは失敗？」

「ええい、こんちきしょーうー！ワシが、ワシが！フランクじやあーいー！」

「おお、懐かしいですね。音速 ですか、こほん！こらー！音速

！おっぱいは1日三回までよ！！」

「チキショー！！おっぱいにありつけない俺にそんなこと言うなんて！最終形態に、最終形態になりさえすれば……。」

「なに？ってそれ、セルですよ！」

おっと、いけねえネタに走りそうになってしまった。昔からコイツと話すとネタにしなければならないからな。

「それより、メディア、発は完成したのか？」

「フッフ、遂に完成しましたよ。マキオさんのスパルタに耐えたあの時間が報われる時がっ！」

「ところで聞きたいことがあるんだが。」

「最後まで聞いてくださいよ。聞きたいことって何ですか。」

「ポンズって隠れ巨乳という噂があるのだがホントなのか？」

むっ、メディアの奴が呆れた顔をしゃがった。やれやれこの人はみたいな、私は分かってますよという顔がム力つくな。

「測ったわけじゃないんですが、確実にCはありますよ。もしかしたらD有るかも……。」

「なにい！ホントか！夢が広がりんだな！ナイスだ、メディア。」

「

「もつと褒めて下さい。」

「調子に乗るな、このチッパイがっ！」

「うう、言ってはならないことを。おっぱいではなく、チッパイに成ってしまうとはメディア一生の不覚です。」

ははは、足搔け苦しみ絶望しろ。前世の頃からオッパイ星人だった。貴様にはかなりの苦痛だろうに。俺を馬鹿にした、報いだ！……なぜだ、なぜ奴はにやけている。

「どうしたメディア、気持ち悪いぞ。」

「ふへへ、ちょっとおっぱいを思い出しましてね。ええ、そうですよ。女性ですから、女湯ですよ。当然じゃありませんか。」

「ナン…だと…。(ば、馬鹿な女湯だと我らがおっぱいの聖地にコイツは入れるというのか…)」

「それでは、一通り絶望したら、帰ってきてくださいね。」

「チクショー…!!」

その後のことは記憶が無い、きっといつものようにおっぱいについて、考えを巡らせているはずだ。断じて悔しさで、枕を濡らしてはいない、断じてだ。

決戦前日（後書き）

我々はおっばいだ！はい12話です。メディアとフランクはオツパイ星人。ポンズは隠れ巨乳、異論は認めない。受験で忙しかった、その反動でこうなったせいなのは確定的に明らか。しかし、フランクは打ちやすかった。

決戦 フェイタン

side フェイタン

団長から仕事が入ったネ、クルタ族の目・緋の目の蒐集、つまり殺して奪えばいいネ。団長の話は長くて、遠まわしに言うから少し退屈、退屈な話より、気になるのはマチとシャルのことネ。あの二人がやられるとは思わないけど、用心に越したことは無いネ。例えば、この仕事は待ち伏せされてたりとか力。

「フィックス、どう思う力。」

「十中八九、罠だろうに、クロロの奴何考えてんのか。」

フィックスも怪しく思ってるみたい力。団長はおかしくなったヨ、周りが見えていない以前なら、もっと面白おかしく厭らしいまでのことをするのに、でも今回の虐殺は楽しみヨ。

「なあ、団長クルタ族ってのは強いのか？」

「なかなかやるらしい、切れると目が赤くなつて強さが倍増するらしい。」

ウヴォーもヤル気が漲ってるネ。生半可な奴らじゃ止められない、誰が相手だろうがヤッテヤルネ。

朝、クルタ族の村。閑静な森の中、待ち伏せにいち早く気づいたのは、野生的感を持ち、常に戦いを欲していたウヴォー

であった。僅かに感ずける臭い、微かな空気の揺れ、そして狩るものの動きの音にウヴォーは気づいた。ウヴォーが気づいた時、男はいた。絶状態の男はとっさに凝でガードしたウヴォーを弾き飛ばした。

「タフだな、お前は。」

「貴様は何者ネ！」

男に気が向いた刹那、悪寒がした。ハッキリとした死の気配、その予感にしたがって身を投げるとさっきまで自分がいたところに女が立っていた。

「あなたがフェイタンね。」

「私の相手は貴様力！」

傘を広げ、女の後ろへ高速で移動し、切りかかる。

しかしその不意打ちともいえる攻撃は易々と避けられる。

女の反撃の袈裟切りを横っ飛びで避ける。あの攻撃を受けてはいけないと本能が囁いている。女の青い目がフェイタンを射抜いている。

「（スピードは此方が上、でもあっちの方が動きが洗練されていて厄介ネ。）」

「そつちを見ていていいの？」

「っ！」

上から枝が落ちてきた、どうやったのか分からなかった。後ろに飛んだ瞬間、また悪寒がした。腕にナイフが刺さっていた。

「あら、また外しちゃった。」

「くっ！（投げナイフ）」

「でも、これはどう？」

今度は3本投げてきた。右に避けると2本が空中でぶつかり左右に弾かれた。

「（不味いネ！）」

なんとか、剣で弾くと後ろで金属音がした。

「ナイフは3本よ。」

「（兆弾！）」

身をギリギリでよじる、ナイフは肩を切り裂いていった。ナイフは避けれた。しかし女の狙い通りだった。ナイフに注意を向かわせること、これが狙いだった。

「その腕、貰うわね。」

女のナイフはまるで豆腐を切るように淀みなく切り裂いていった。フェイタンの左手を奪っていった。

「うぐああああ！」

「まだ、終わらないわよ。」

力の限り、悪寒から避け続ける。フェイタンは逃げの体勢をとっていた。

「また外れか。」

フェイタンに肉薄しては、その手にもつナイフで切りつけていく女。

「（死にたくないネ！）」

紙一重でかわしていくフェイタン、しかし冷静さを失ったフェイタンは女のフェイントにかかり傷を増やしていく。

「これで終わりよ。」

フェイタンの痛みが臨界点を越えた。瞬時に変わる服装、さつきとはまるで違う威圧感。

「腐的女人？乗情形？？疼痛？（クソ女が、調子に乗るな。殺してやるよ、痛みを返すぜ）」

灼熱に換えて！！！《許されざる者・ペインハッカー》

《太陽に灼かれて・ライジングサン》

「要是？个是不是做了？（これならやったか？）」

いままでこの能力を使ってやれなかったことはない、しかしフェイタンの胸のうちにはざわめく様な予感があった。死の予感、あの女が現れてから一度も薄れたことのない、思わず逃げてしまいたくなる。気配がまだ残っていたからだ。

「ばいばい、お仲間も同じ所に送ってあげるから。」

胸の中心からやや左にズレタ場所を刺されて、体から何かが無くなっていくような感覚と共にフェイタンの肉体は崩れていった。

「私はポンズ、この名前を抱きながらゆっくり死んでいったね。」

ポンズのまるで何も感じていない、そんなふうな顔を睨みながら最後に言えたのは。

「能死、糞的^く女人。（死ね、くそ女）」

一言だけであった。

s i d e e n d フェイタン

決戦 フェイタン（後書き）

フェイタンの話し方が分からない。はい13話です。連投です。サイセンwwあつさりとした戦闘、フェイタン退場のお知らせ、フェイタンの念が描写無しなのはしようです。直死の魔眼マジチートです。最後にふえいたんは女のこの方がよかったです。

決戦 メディア ボノレノフ（前書き）

さーさくさくバトルタイムですよ。

決戦 メディア ボノレノフ

side メディア

「今日、夜が明ける前にこの村に旅団が来る。」

「その話はどこで聞いたんだい？」

「昨日、シャルナークとマチを捕獲した。二人の監視はアデルがついている。」

「はあー、マキオさんは凄いですね。此処まで、あっさりと進んでいくといつそ清らしいまでの怪しさですね。何者なんでしょうか？強くて賢くて…容姿も良いし、でも主人公ってより最後の最後に裏切るラスボスって雰囲気なんですよ。皆が誰を担当するか、話し合ってますけど、私は戦闘要員じゃないんで気にしなくてもいいですから、気が楽です。」

「メディアは村の人の避難を手伝いつつ皆の支援をお願いするよ。」

「はい！分かってます。誰かが重傷又はフェイタンが発を使用したときで良いんですよ。」

「うん、そうだよ。メディアは今回の作戦の重要な鍵だからね。」

「ただし、重傷者は僕以外が負った場合だからね。いいかい？」

「はあ、分かりました。」

「マキオさん以外ですか。つまりマキオさんは傷を負っても治せるってことですか？マキオさんですからできそうですね。そんなことより僕の発を本邦初公開ですよ！」

『緊急病棟24時・ハイパーメディアクリニック』複数名の傷を再生することができる。再生途中は完全無敵で当たり判定が無い。制約内容、患者は名簿に名前を書かないといけない。名簿は患者が書かないといけない。患者を同時に治すことは出来るが、個別で分けることはできず、まとめて治療される。デメリット、名簿に書かれた時の状態に再生されるため、怪我をしてから書いてもその状態が記載される。メリット、複数人を治せる。擬似的な不老不死を再現できる。

露骨な文字稼ぎ？いいえ、親切心です。

~~~~~

「皆さん！避難して下さい！」

現場のメディアです。現在午前4時、村の南西部にて旅団の接近が確認され、マキオさんがたが迅速に処理に向かった模様です。現場からは以上です。

ふう、ボクです。いっかいアナウンサーを試してみたかったですよ。さてと、ボクはやぐらの上で戦況を確認ですね。

おお、皆見事にバラけてますね。ポンズさんが中心らへんで戦ってて、周りを囲むようになってます。クロ口は…かなり遠くでよく見えないですね。真人さんは大丈夫でしょうか？

…速すぎっ！ポンスさんってあんなに動くの速かったんですね。  
どんどん離れていってます。ああ、もうどこに行ったやら分からないです。

村から一番近いところで戦っている。マキオさんとウヴオーギンは凄く殴り合いしてます。リアルグラップラーバキですね。手に汗握る戦いです。ウヴオーギンの体がっ！あっあっ！すごい…肉体です…。

とお！すごい念の量です。もしかしてフェイタンが発をしたんでしょうか？おっと忘れるところでした。『ハイパーメディアクリニツク』！！

あれ？おかしいな十秒くらいは掛かるんだけど、直ぐに終わっちゃった。どういうことでしょうか？

side change ボノレノフ

「あゝあ、女の子とやりたかったな。でも女性に手を上げるのもなんだから別によかったのか？でも相手が気持ち悪いおっさんならばこぼこにして気になんかしないな。あんたの名前はなんていうんだ？」

「ボノレノフだ、ギルドンドンド族の舞闘士<sup>バブ</sup>としてお前に一曲くれてやるう。」

「固いやつだね。俺はフランクだ。さあ、始めようぜ！」

最初に見たときは、ただの馬鹿だと思ったが一つ一つの会話の中

でも隙はない。どうやらなかなかの使い手らしい。

さあ、今こそ！ギュドンドンド族の死の舞踏をみせてやるとしよう。『戦闘演武曲（バト＝レ・カンタービレ）』ボノレノフは体中に包帯を巻いており、包帯の下の体には多数の穴が空いており、ギュドンドンド族の舞闘士はその穴を使って音を奏でることができる。ボノレノフはその音で攻撃を相手に見舞う。

「コイツはすげえや。」

フランクの攻撃は届かない、ギュドンドンド族の動きは狩りの技、古い戦いの歴史、深い森の奥地で猛獣を狩るために培われたものだ。つまり、フランクの喧嘩殺法は触れることも敵わなかった。

「どうした？まだプロローグだぞ、是非ともエピローグまで聞いて欲しい物だが。」

蛮族の格好をしたボノレノフがフランクの肌を切り裂く！

「段々威力と速さが上がっているな。こりや厳しいな。」

フランクの蹴りや打撃は空回りを起こすことしか出来ない。そしてフランクは逃げることを選んだようだ

「逃がすか！これで終わりだ！『戦闘演武曲（バト＝レ・カンタービレ）』木星・ジュピター」

ボノレノフが猛追する。やがて追いつき、フランクの後ろまで来た。

「ああ、これで終わりだよ。『暴君の大騒音 ジャイアンズリサ イタル』――」

フランクの発した大音量の音がボノレノフの音楽を妨害し、ボノレノフの三半規管等の重大な故障を与えた。



「悪いなおっさん、俺とあんたの相性は最悪だったんだぜ？あんたの念は体から出す音を媒介に使う、確かに強力だがタイムラグがあるのはいただけねえな。…もう何も聞こえねえか。」

ボノレノフの意識はフランクが声を発した時に閉ざされていた。音というのは振動であり、振動が強くなると衝撃になる。フランクの能力は距離が離れていると三半規管が揺れ、気分が悪くなるくらいだが、至近距離で喰らってしまうと頭の中に直接ダメージを負ってしまい戦闘不能になってしまう。余談だがフランクは130デシベルという脅威の音量を持ち、これは飛行機のエンジン音を百メートル以内で聞いているのと同等である。

s i d e   e n d   ボノレノフ

## 決戦 メディア ボノレノフ（後書き）

はい、14話です。戦闘描写が糞杉ですね。チツ反省してマース昨日友達が私の漫画にコーラをぶちまけやがった時の私の罵声に対する返しです。思わず呆気を取られて許してしまいました。まあ、別に重版だからいいんですけどね。

## 決戦 フィンクス ノブナガ（前書き）

ビックバンインパクト！小型ミサイルと同じ威力  
サイクロトロン！地球が割れる

ウヴォー涙目！しかし、私はそんなウヴォーが好きなんだぜ。好きなキャラは活躍する。つまりノブナガが強いはずです。よってノブナガtueeです。フィンクスファンには涙を飲んでもらいます。原作四年前だから弱くてもしょうがないよね！

## 決戦 フィンクス ノブナガ

side フィンクス

俺の目の前には、歪んだ笑みを顔に貼り付けた男がいる。その男は最初にこういった。

「君がフィンクスだね。せいぜい楽しませてもらおうか。」

と、俺は激情に身を任せ暴力に訴えた。俺の名前を相手が知っているということをよく考えもせず。違和感を感情で振り払った。いつもより体が流れることを気にもせず。

「（クソ！何であたらねえ！）てめえ！何モンだ！」

「くすくす、応えたら何かこの状況が変わるのかな？」

俺の『廻天』<sup>リッパー・サイクロトロン</sup>は腕を回せばまわすほど殴った時の威力が跳ね上がる物だ。殴った時に威力が大きくなるってことは攻撃を空回りさせられたら、無用の長物になるってことだ。つまり、当たらなくちゃ意味が無い。

砂を巻き上げて蹴り込んでもアイツにはあたらねえ。

「どうしたの？息が上がってるよ。」

「黙れゴラア！」

木をぶん殴って、アイツに向かってぶっ飛ばしても軽く避けられ

る。

「何かした？」

「……ハアハア。」

手当たり次第、アイツにぶっ飛ばし、その合間を縫って近づいて殴りにいっても掠りもしない。

「すごいね、あつという間に広場になっちゃったよ。」

「ハアハア、今すぐ口も利けないようにしてやるよ。」

幾分か冷静になった俺は、明確な意図を持って追撃を行う。

「鬼さん此方！なんてね。」

「はあはあ（あと少しだ。）」

「どうしたの？もう疲れちゃったのかな？」

此方の攻撃は一切当たらない、空を切るばかり。アイツは円を描くように攻撃を捌きながら避け続ける。

「アハハハハ、必死な顔をしているね。どうしてあつ！」

「（来た！これをまっていた。）死ねやゴラァ！」

俺が砂埃で起こした位置、そこに深く穴が開いていて、穴の上には木の枝が被さり、パツと見ても分からなくなっている。あいつはそこに足を取られ、決定的な隙つくった。俺は確信していた。当たらなければ、当たるようにすればいいと、チャンスは来た。

「なんてね、残念でした。」

「ぐええ、あなんでえあたらねえ。」

「何でだろうね、君が知ることは無いけどね。」

しかし、俺の攻撃は奇妙なほど、今までに比べて、異様なまでに体が流れてしまった。まるで俺の体がアイツの隣の木に引つ張られるように流れてしまった。折れた木の枝が首に刺さるその瞬間、時間が止まってしまったかと思うほどゆっくりと流れていった。俺はそんな時間の中、あの時、よく考えていたら。アイツが俺のこと知っていたこと、体が妙に流れるのを気にしていたら、もしかしたら結果は変わっていたかもしれないと考えていた。

でもそんな可能性は自らの手で摘み取ってしまった。この男に勝つことはない、首から流れる血が教えてくれる。俺はもう死んでしまうと感じている。

アイツは俺を見下していた。路傍の石を見るような詰まらない物を見るそんな目だった。

side change ノブナガ

俺はノブナガ、ノブナガハザマっていうんだが、まあなんだ今はクロロが頭の幻影旅団つてのに入ってる。おれ自身にはこれといって目的は無いんだが、同郷のよしみで周りに流される形で入ったわけだ。よくつるんでたウヴォーやシャル、フランクリンがかなり

乗り気だったのが大きな理由だ。脳味噌筋肉のウヴオーと性悪のシヤルは、流星街の外の世界にすぐ興味津々で、フランクリンでさえクロ口の話聞いてからソワソワしてやがった。

俺の家はよ、ジャポンの出でよ。俺の曾爺さんが何処かのお嬢さんと駆け落ちして海を渡ったらしくて流れ流れてこんな所まで移り住んできたとき。そんなことは知ったこっちゃねえし、爺の惚気というか自慢話を聞いてもフーンで済ませるが、曾爺さんも爺さんも親父も剣を捨てなかった。だから俺も剣を使う、日本刀っていうらしくて、切れ味は随一よ、親父や爺さんなら鉄塊でも細切れに出来るってんだ。恐ろしいもんだね。

俺が習った、剣は氣っていうものがあるんだが、こっちでは念と違ってすげー色々出来る見てーだ。俺は強化系だから面白いのはできなかった。タイマンだったら負けねえぜ？だからよ。

「俺はノブナガハザマだ、お前の名前はなんだ？」

「マサムネ、マサムネアゲハラだ。宝蔵院流槍術の使い手として、波佐間の剣と立ち合わせてもらおう。」

「宝蔵院流槍術：既に失伝してたと聞いてたんだが。」

「…口伝で身内にのみ伝わってきた。しかし脈々とその業を受け継いできた。我が十字槍、受けてみよ！」

「やれやれ、ヤル氣びんびんだ。…波佐間信長押して参る！！」

一瞬のにらみ合いの後、ノブナガが出る。

「っしい！」

鞘から刀身をスラリと出した、ノブナガは上段に構え、真上から振り下ろす、一の太刀。十字槍を持ち、斜に構えたマサムネは静かに左前方へ歩を進め、僅か数センチのところで刀を避ける。

二人の目が合う、マサムネは笑っており、ノブナガは厳めしく睨んでいる。

「そいやあ！」

攻守が入れ替わり、マサムネの下からの突き上げ、その槍は正確にノブナガの喉元を挟むための進む。

が、ノブナガに切り上げにより、薄皮を裂く程度で、槍は逸れていく。

「っふう！」

ノブナガが逆胴を狙いに薙ぐ、しかしマサムネは後ろに下がることで、距離を取る。

戦いは続く、ノブナガが切り込めば、マサムネが避け、マサムネが突けば、ノブナガが防ぐ、攻守が頻繁に切り替わり、4合5合と闘ぎ合いが終わることなく、己の命を乗せて相手の命を狩る死合いが続いてゆく。

ノブナガは攻めあぐねていた。槍の距離感が掴めない、近寄れば打ち払われ流される。遠くから牽制すれば、槍の間合いから手酷く反撃される。

槍だけでなく、マサムネ自身も上手いのだ。振り下ろせば、横に避け、横に薙げば、地に這う様に避ける。足を払えば、槍を使い天に逃げ、体術にて反撃する。どの様に攻撃しても変幻自在に避け、流され、払われる。一度距離を取らせてしまえば、相手のペースになる。



故の守り、如何なる攻め方でこられようと、切つて落とす。波佐間の剣、即ち間の一太刀。守勢において力を發揮する、神速の居合い。対一において負けなし、対多でも守勢に周れば、何者も通さない、難攻不落となる。

マサムネも気づく、ノブナガが守勢、ノブナガの円が展開した時、形勢が変わってしまったことに。苦手だったのだ、マサムネにとつて攻撃というのは、相手の隙を突き反撃し打ち倒す、だから自ら攻めるのは大きな隙作ることに他ならない、だから動けない。

両者の額に汗が伝う、頬を過ぎ、顎に至り、地に落ちる。

「（攻めれば、切つて落とされる。ただ待つ、最善の一手が出来る機会が来るまで！）」

片方が緊張し、機会が来るのを待つこの状況。

「（マサムネって切れ長な目してるな、睫毛も長くて顔も整ってるし、いかにももてますよ私みたいな顔の造りだな。妬ましい、シヤルにこの前貸して貰った。エロゲの主人公みたいだな。段々ハラが立ってきたぞ、よいい事思いついた。隙について鼻を切り落としてやるう。）」と、物凄く俗なことを考えていた。

どれくらい時間が経っただろうか。10分20分か？二人にとってその数倍以上の時が流れただろう。周りで戦いの残響が響いても、近くをどこから飛んできた巨木が落ちてきても、土煙がたちこんで二人を包もうとも動かなかった。しかし、そんな戦いにも動きがあった。同時刻でフェイタンが念能力を使った時、それに呼応してメディアが念能力を使った時、マサムネが動いた。

「（この時を待っていた！メディアの能力で体が無敵に成った時

を！）これで終わりだ！ノブナガア！」

マサムネの渾身の突きこみ、ノブナガが反応するもマサムネに当たることは無い。

「何が起きた？」

ノブナガは困惑していた。さっき確かにマサムネの突きが俺に襲い掛かったと筈だと、俺の攻撃は何故かマサムネに当たらず、負けてしまった筈だと。二人が気づいた時、ノブナガはマサムネの槍を左手で掴み、マサムネは右手でノブナガの刀を持っている右手を押さえていた。

「（今は、時がぶっ飛ばされたような奇妙な現象、キングクリムゾンか！なんてタイミングだ。仕方ないこの近さなら！）」『孤軍奮闘 ステゴロタイマン』

「なんだ！？」

世界が無地の白に変わる、そこは100m四方の空間へと変わった。二人共絶の状態に自動的に切り替わる。一歩進めば罠だらけの部屋になった。

この部屋ではオーラを出すことが出来ない。周りは罠だらけ、しかもマサムネはどこに罠があつてどのよう動くか初めから分かっている。能力の制限と不可視の罠。罠を踏んでも踏んだ感触が無い。ため反応が遅れる。相手に不利なように出来ている。

マサムネが動く、一步後ろに引く。とつさにノブナガが動こうとするとマサムネの後方から矢が飛んできた。当然、マサムネは当たらない位置にいるのでノブナガは打ち落とす。

「ここでは、二人共強制的に絶になり、さらに周りには大量の罠が張られてある。」

一気の距離を取った、マサムネは発動した罠である上からの落石をノブナガに向かって弾く、ノブナガが避けるとトラバサミが発動し、足に食いついてきた。

「つつう！」

「二度は無いぞ、ノブナガァ！」

ノブナガは足にトラバサミが付いたまま、刀を鞘に納め、居合いの準備をする。マサムネはノブナガに近づくと同時に矢の罠だけ踏んで肉薄する。

「それはもう見たぞ！」

「っしい！」

ノブナガは身体に矢が刺さっても構わず構えを取り続け、マサムネが間合いに入った瞬間に居合い。

しかし、マサムネはそれを上回り居合いを避け、渾身の突き。

先ほどの焼き増しのように繰り返された戦い。先ほどはどの様に終わったか分からなかった。

マサムネは勝利を確信していた。

『秘技・燕返し』マサムネに襲い掛かる背後からの突然の衝撃、避けたはずの斬撃。

その斬撃は姿勢を低くして避けたマサムネの両足の腱を割いた。

倒れこむマサムネ、倒れた先に待ち受ける罠・落とし穴の中には身体を串刺しにしてしまう杭が敷き詰まっている。

咄嗟に能力を解除する。景色が戻る森の中へ。

「ふう、危なかったぜ。さてと他の連中は大丈夫か？」

ノブナガはマサムネをほおって置いて歩いていく。

「なんだ？おかしいぞ目が霞む。」

しかし、矢に塗られていた毒により、倒れこんでしまう

森の中に倒れている二人、武術家としての勝利を制したのはノブナガであったが、敵の各個無力化という作戦において勝ったのはマサムネであった。

戦いはまだ続いている。

## 決戦 フィンクス ノブナガ（後書き）

ノブナガの念能力の補足です。

《侍魂》 - 絶状態でのみ発動、秘技が使えるようになる。

燕返し 背後から無数の斬撃喰らわせる同時に来るので初見殺し秘技は他にもある筈、そして発動条件が絶限定とかなりのロマン技だから普段は使いません。あと今回マサムネは峰打ちされたでござる。

## 決戦 その他の人（前書き）

やっちまった。16話です。いろいろすみません、読めば分かります。正直書かなくてもよかった。

## 決戦 その他の人

side フランクリン

「へー、フランクリンさんはシャル君と幼馴染なんですか。」

「あ、ああシャルは昔から狡賢くてな。ウヴォーやノブナガをコントロールして色々悪戯をしててな…。」

なぜコイツと話しているんだろうな？目の前にいる女、スパーと  
いったか、こいつは敵のリーダーの話ばかりしやがる。

…ああ、そうか腹を撃たれたんだっけ、銃弾には筋弛緩剤が入っ  
てて動けないんだった。遠距離射撃にはどうしようもねえな、ウヴ  
オーじゃあるまいし普通に効くからな。

「それですね。この前、フランクさんがナンパしてたんですけ  
ど、ふられちゃったんですよ。まあ、なんですか滲み出る下心が悪  
いんですかね？」

「フランクだが、シラネーがやり方が悪いんじゃないのか？」

あー、他の奴らはどうしたかな。ウヴォーとか搦め手でやられた  
か？

「この前のザパン市で料理対決の番組があって、マキオさんと出  
たんですけど、惜しくも準優勝でしてね。」

「どっかで見たとあると思ったら、炎の料理人グランプリのマ  
マさんチームの人か。」

「ええ、そうですけどフランクリンさんも見るんですね。」

なんか久々に平和だな。一度実家に帰るかな。かーさん元気かな？

side クロロ

突然の襲撃、しかし予期していた奇襲だった。メンバーはバラバラに攻撃され、ちりじりになってしまふ。俺の相手は想定の範囲内。

「クロロ！仲間の仇取らせてもらっ！」

「…。」

あらゆるものを反射する念能力者、なかなか厄介だが倒せないわけではない。出来れば奪いたいところだが殺すしかあるまい。

「仲間の仇？」

「何だと！！」

「…そうか思い出したぞ。泣き叫んで命乞いをして、お前の言う仲間を裏切って、死んでいった愚かな男のことだろう？ははは！余りに顔がぐちゃぐちゃで思わず、踏み潰してしまったよ。」

「貴様ああああ！！絶対に許さねえ！！」

さて煽るだけ煽ったし、どうやって倒そうか。彼の能力の許容範囲を超える攻撃、彼の能力が反応する前に倒す、彼の能力を禁じた状態にするか。まあやり様は幾らでもあるか、一つ一つ試していけばいいか。



「命乞いの準備はいいかな？あの男のようにな。」  
「大輔のことかあああ！！！」

俺はだれにも止められない。見てくれ、パク。

side change アデル

一方アジトで二人を見張っているアデルはというと。

「ザバン市独占来たー！」

「おおー、またですか。（おっと、旅団が襲撃してきたようですね。）」

「くそう、シャルの癖に調子に乗って！」

「あ、マチさん。すみませんがノットリ君で貴方のパドキアの独占崩させて貰いますね。（まず先手は私達が取ったようですね。）」

「ええ！ちよつと待ってよ！」

「アハは！目的地もーらい！」

三人仲良く、桃○郎電鉄、ハンター編をやっていた。もともと、逃げる気の無かったシャルナークとマチは丁寧なアデルの対応に悪い気はせず、好感をもった。

「アハは！これで俺の優勝は固いよ！」

「悪いね、ここで牛歩カードだよ！」

「ああ、なんてこった！0マス駅に挟まれちゃった。」

丁寧な接待に美味しいものをご馳走され、見事懐柔された二人は暇つぶしのためにゲームをすることになった。

「ううう、現金が無くなっちゃった。」

「すみませんがシャル、貧乏神直撃カードです（真人、マサムネ、ノブナガ、フランクリン、ボノレノフがりタイア。フェイタン、フィックスが死亡ですか。別に仕事は撃退だから殺さなくても良かったんですが、まああの二人は扱いずらいですからね。）」

「げげげ！貧乏神が憑いちゃった。」

アジトの二階、食堂の隣の部屋の居間、そこには大量のゲームやビリヤード、ダーツ等の遊具が置いてあった。テレビの前のソファで三人は寛ぎながら、ゲームをプレイしていた。

「ふっふっふ！シャルー。」

「うっ！どうしたのさ。マチ…。」

「一生のお願いカード！」

「ぎゃああああ！キング様あー！」

「「キヤーキング様！！！」」

初めはマチが優勢に動いていたが、シャルナークが進行形を集め、怒涛の目的地あさりを行う。アデルは地味に二位を保ちつつ、妨害カードを集めていた。その結果が

「あー！うんちに挟まれた！キング様に憑かれてるのに…  
ああ、ここでフィングーフレアボムズとか…。」

「シャルざまあ！！って銀二さん！全額だけは、全額だけは、あ…。」

「じゃあ、わたしは物件でもあさりますか。」

二人に大差をつけて、優勝したアデルであった。アジトメンバーはアデルとは絶対に人生ゲームや桃鉄など、運が大きなウエイトを占めるゲームをやらない、彼が強すぎるからである。ついたあだ名がリアルサクマである。

s i d e   e n d

## 決戦 圧倒的なほど（前書き）

これがやりたくてハンターSSを書いていたんですよ。17話です。

## 決戦 圧倒的なほど

side ウヴオーギン

ウヴオーは気づいた、森の音に混じる、不自然な衣ズレの音。ウヴオーは感じた、自分達に物凄いスピードで近づいてくる奴を。ウヴオーは近づく奴が今までの敵の中でピカイチの実力を持つことに歓喜した。

「ヒュ！」

「（速い！そして重い！）」

背後から迫る、影。そして衝撃。相手の攻撃を感じ取ってガードした腕ごと持っていくほどの蹴り、衝撃を受け止めきれず体が真横に吹っ飛んでいく。木の枝にぶつかりながら飛ばされる。

「中々良い蹴りしてんじゃねえか（腕が痺れてやがる。）」

「そっちは中々頑丈だね。」

ウヴオーの目の前に現れたのは、顔に笑みを貼り付けた、優男であつた。

「てめえは楽しめそうだな。（こんなヒョロッこい奴が：あんな蹴りを？そんな強い念を感じなかったが、いやほとんど感じなかった。アイツは絶である威力を出したのか？なんらかの能力と見たほうがいいか。）」

「お手柔らかに頼むよ。」

「（うさんくせえな。）」

睨み合い、言葉で相手の手の内を探ろうとしても効果は無く、挑発しても無意味だろうと当たりをつけ、一気に両者は戦闘状態に入る。ウヴオーは爆発的にオーラを出し、堅をする。一方、マキオはオーラを脈打つように緩やかに流していく。

「そういえば、名乗ってなかったね。俺はマキオだよ。」

「そうだったな、俺は「ウヴオーギンだろ？」やっぱり知ってたか（なるほど今回の奇襲は計画的だったわけか…。）なら遠慮はいらねえなっ！」

ウヴオーが地面を踏み砕き、マキオに突進してくる。爆音と共に高速で走り、そのままの勢いで無造作にぶん殴る。

「激流に身を任せ。」

力の限り握りこんだ拳は、流され。

「同化する。」

「ガアッ！」

後頭部に裏拳を当てられる。ウヴオーの身体は勢いを殺せず、大木を薙ぎ倒しながら前進する。ムクリとウヴオーは何事も無かったかのように起き上がる。

「頑丈だね。」

「ふんっ！（頭がズキズキしやがる、あんなちっぽけなオーラで俺の堅を破りやがったのか…。）」

先ほど変わらないように、ウヴォーが突進する。だがウヴォーは攻撃の間合いに入った時、マキオに組み付こうとタックルを仕掛けてきた。

「掴んじまえばこっちのもんよ！」

「クフフ。」

マキオの胸倉を掴んだ、ウヴォーであったが直ぐに離してしまう。後ろに下がるウヴォー。距離を取るウヴォーの手首は外れてしまっていた。

「くっ！てめえ、何しやがった。（気がついたら、外されてたぜ。

）

「クフフ、いやいや余りにも隙だらけで、ついやってしまったよ。」

ゴキッゴキッと手首を嵌めなおすウヴォー。警戒して近づくどころか、後ろに下がったウヴォーとゆっくりと近づくマキオ。

「攻守交替だよ。」

ぬるつと音がするような、滑らかな突き。咄嗟にウヴォーは避けてしまっ、速さも力も踏み込みさえしていないような崩拳を、葉に枝に幹に当たろうと構わず避けてしまった。

「おや？どうしたんだい、さっきまでの威勢は何処に行ったんだい？」

また踏み込み、中段突き。避ける、あの拳に当たることを避ける。

マキオが攻撃すれば、避けるウヴオー。何度も繰り返される光景、やがて周りに立っている木が無くなり、倒木で足の踏みどころも無くなった頃、傷だらけのウヴオーを見てマキオは

「そろそろ飽きたよこの展開はっ！」

地面が揺れたかのような震脚、巨木の幹を踏み込み、決れる。巨木は周りの木を巻き込んで起き上がる。ウヴオーの眼前に現れたのは木の壁、マキオの姿を楽に隠し、攻め手が分からなくなってしまう。そして瞬間的なオーラの高まり。

「ちっ！何も見えねえ！（何処から来る、正面か上か横か。）」  
「どっせい！！」

マキオの拳は地を砕き、大きなクレーター、そして衝撃波が周囲に放たれる。その衝撃波によって起き上がった木がまるでバリスタの砲弾のように弾かれる。

周りは戦争しているかのような、破壊音を撒き散らし、砂煙に混ざって土砂が降り積もる。やがて煙が晴れた時には驚きべき惨状が広がっていた。

「マジかよ…。（20…いや30メートルくらいのどでかい穴が出来てやがる。ありえねえぜ、もしあれを喰らっていたら…。）」

ウヴオーは目の前の光景が信じられず、呆然としていた。それは大きな決定的な隙であった。

「隙有りだよ。」





## 決戦 野獣咆哮

衝撃！隙を見せた、ウヴオーであったが、今まで避けに避けてマキオの攻撃の呼吸を感じ取ることが出来るようになったウヴオーは維持していた堅を一箇所に集め、ガードに回した。

全力で凝！振り返った、ウヴオーはマキオの前蹴りを左腕を犠牲に耐えた。ウヴオーの莫大なオーラをまるでフェンシングのように鋭い蹴りは貫き、腕に突き刺さった。蹴りの衝撃はウヴオーをぶっ飛ばした。

「ぎぎっ！」

痛みがウヴオーの精神に直撃した。確かにマキオは強い、己より遙か高みにいる。しかし、逃げて勝てる相手だろうか？たとえ兎と獅子のように力が離れていようと逃げていいのだろうか。そんな訳が無い、さっきまでの己は戦いから逃げていた。

「（アイツにビビッてた、認めよう俺はアイツを恐れていた。）」

革命、ウヴオーに意識に革命が起こっていた。恐怖に立ち向かう大きな一歩、人に許された高度な精神状態、追い詰められ恐慌状態に陥った時の反射でも、慢心からなる蛮勇でもない。それは勇氣、恐怖に立ち向かう気概、敵の恐ろしさを感じ、自分の力量を把握し、判断する。

「（強くなりてー誰よりもマキオよりもだ！）」

ウヴオーの身体に変化が起こる。筋肉が隆起し、締まっていく、身体は大きくならず、ただ強靱に、強固に、頑丈な筋肉構造に変わっていく。今までに無い昂揚感がウヴオーを高みに引き上げていく。

「ウオオオオオオオオオ！！！！」

自分に対する怒り、マキオに対する恐れと尊敬。爆発した。

マキオの視認スピードギリギリの速さで動き、今までの倍近いオーラでウヴオーがマキオを殴る。

「チッ！」

殴られた衝撃を消力で完璧に流し、そのままの勢いでウヴオーに回し蹴り。

「驚いたよ、全然動きが違っじゃないか。」

「ガアッ！」

ウヴオーの堅牢なオーラはマキオの攻撃を防ぎ、攻勢に転じさせる。腕を真上から降り下ろす一撃、それすらも消力で流し、左回し蹴りをウヴオーの頭に与える。ウヴオーも少しぐらっただけで立っている。

「（効くぜ！マキオはどうやって殴っているんだ？）」

ウヴオーの右ストレート。それは明らかな進化だった。技術を感じさせるものだった。動きに合わされて反撃を食らうも今度はぐらっかない。

「（もつと速く！もつと強く踏み込む！）」

ウヴオーの回し蹴り。完全に力の乗ったその蹴りはジャブの速さを超え、霞んでいた。さっきよりの強い反撃をされてもぐらつかない。

二人は疑問に思った。余りにも速い成長速度に。そうなぜならウヴオーが無意識に作り上げてしまったからだ。ウヴオーの向上心が生み出した念。

『闘神演武』 - 戦うことにより戦闘能力を高める、相手に勝つか、自分が負けるまで効果は続く。制約、自らが格上と認めた相手でないといけない。

ウヴオーのメモリを全て喰い潰して発動できた。この念は、今この場で大きく効力を発揮する。マキオの慢心がウヴオーを進化させた。最早、ウヴオーの拳はマキオに届く。

「（マキオは構えてから打撃が当たる時、ギリギリまで脱力をしている。俺にも出来るはずだ！）」

「これは驚いた。」

パンッ！という空気が裂ける音。ウヴオーの手に広がる確かな手応え、拳に付いた血の跡はマキオのもの。マキオの頬に傷一つ、ウヴオーの拳がマキオを捉え始めた。

「ぐぎぎっ！」

ウヴオーの肉体に起こる、筋肉の超蠕動、マキオの業を再現する

ために必要な物と不要な物に分けられていく。盛り上がった筋肉は贅肉と判断され落ちていき、肉が締まりその様は金属のように変わっていく。柔らかくしなやかである反面、剛性も併せ持つ、日本刀のような身体へと変貌していった。

「シッ！」

ウヴオーが拳を足を振るうたびに、マキオの身体は軋み裂傷が増える。卓越した足捌きや構えは既に達人の域、その常人離れた身体能力は最早人ではなく、いふなればそう鬼、オーガである。マキオが消力に対抗しようとも速さ、力において及ぶべきもなく、技術でさえも恐るべき勢いで駆け上ってくる。

「はっ！」

「ふっ！」

マキオの掌底、ウヴオーの胸元に吸い込まれるような一打は新たな衝撃をマキオに与えた。インパクトの際、その寸前で行われた、刹那の脱力、ウヴオーの消力が衝撃を殺した。いまだ拙い出来ではあったが、紛れもなく消力であった。

「（まだまだ！脱力しきれていねえ、でもこれは俺の性に合わないもつと俺に合うものが在る筈だ。脱力だ、何だと小手先の技術じゃない何かか。）」

「てめえ、調子こいてんじゃねえぞ。」

マキオのオーラが歪む、先ほどまでの攻防一体ではなくより攻撃的に圧力を増した。ウヴオーは感じた、マキオの力の解放を、それに呼応するように自らの肉が次なる者へと換えようとしてきた。内なる力の解放、身体を力に預ける。身体をより効率よく動かすので

はなく、任せてしまう身体に動いて貰う、本能で戦い、頭は判断するだけでよい、身体がいつている任せると必ず目の前の奴を完璧に超える肉になるからお前は考えるだけでいいと。ならばそうしよう、ウヴォーは更なる高みへ昇る。

「調子こかせてもらっぜ、ぬりやあああああ！！！」  
「おおお。」

盛り上がる筋肉、痩せて全身が筋の様になった肉は三度変貌を遂げる。驚異的な贅力を産み出すために筋肉を増やす、筋密度はそのままだ。動きを阻害しない程度に増えた肉はウヴォーを戦闘形態に変えた。背中の筋肉が産み出したのは鬼の形相、怒り猛る憤怒の顔がマキオを睨む。

「ぜりやああああ！！」

構えをせず、自然体からの渾身の一撃は、正に暴風、人の身で在りながら最早災害レベルにまでなった、これは容易くマキオを吹き飛ばした。地面と平行に飛ぶマキオはその辺に転がっている夥しい木の山へと突っ込んでいった。

## 決戦 シンプルな攻撃ほど効く

そこから中に木片が散らばり、ウヴォーが様子を窺う。

「（手応えあり！どれくらいダメージを与えられたんだ？まだ終わらないで欲しいぜ。マキオ！俺はまだまだ強くなれるぜ！）」

不意に感じる、膨大なオーラの高まり、危険なほどのその力は気の向こう側からする。

「このオーラは…フェイタンの奴か！（不味い！マキオの奴じゃ、耐えられない！ちっ！フェイタンの野郎やるならもつと離れてやれってんだ！）」

破壊的な熱量が吹き荒れる、空気を焼き尽くし木々が消失した。

ウヴォーは地面を砕き、その穴に入り、呼吸を止めて限界ギリギリまでオーラを放出して防御に入った。

フェイタンの人為災害は一瞬で過ぎ去った。フェイタンを中心として森は荒野と化していた。

「なっ！俺のオーラが減っていく！」

「どうやら、その能力まだ制御できていないようだな。」

マキオに喰らわせた、ウヴォーの現在の最大の攻撃、そしてトドメのフェイタンの能力が加わり完全に気が抜けてしまい『闘神演舞』が途切れてしまった。無意識の内に創られた、能力が途切れてしまふのは当然、本能が望んだ能力は我に返ってしまえば制御不可。





金属音、炸裂音、爆音、森の中では普段ではありえない音が流れている。

「クロロ！逃げるのか！この臆病者！」

「反射なんてしてるお前程じゃないね。（完全に頭に血が上っていてやりやすいなあ。）」

真人は無傷、対するクロロは所々傷があるのが見える。クロロが何処から取り出したナイフを死角から投げるも弾かれる。真人は投げられたにも係わらず全く気づかずにクロロを追いかける。

「お前、綺麗な顔しているな。実は女なんじゃないのか、ああ、なるほどだからそんなに怒っているわけだ。恋人だったのか。（あの能力は無意識なのか、厄介だな。）」

「ふざけるな！俺は男だ！」

「ああ、ホモなのか。（さてどうしようかな？）」

「キサマアア嗚呼！！」

時間を忘れ、クロロを追う真人、真人の執念、いや怨念といってもいい怒りから逃げ続けるクロロ。

「おやおや、女のヒステリーは怖いな（となるとオーラが無くなるのを待つか、能力を上回る攻撃かな？）」

「クウロオロオオオ！！！」

真人のベクトル操作による攻撃も怒りとクロロの素早い動きで定まらず、当たることがない。

「はあー（この膠着を何とかしたいのだが、何か無いかな？・・・・・・！このオーラはフェイタンか、使えるな。）」

クロロがページを捲り、フェイタンとは正反対の方向へ石を投げる。膨れ上がるオーラ、フェイタンの念を感じながらそっちへ走る二人、当然真人も気づいたが構わず向かう。

フェイタンの能力が発動、それに合わせてメディアの能力が発動する。フェイタンの炎を反射し、メディアの無敵回復も反射する。そして堅で耐えていたクロロが動く。

「『キングクリムゾン』！！これで奴は俺を知覚出来ない。ふむ、今のところ全部反射しているがずいぶん辛そうな顔をしているじゃないか。」

クロロが時をぶっ飛ばす、このときクロロは誰からも干渉を受けず、自由である。

「フェイタンはもう其処まで敵が迫っているのか・・・。」

クロロが見たのはフェイタンの最後の時、彼しか知覚できない仲間の死の目撃であった。仲間の犠牲を無駄にしない、そう思ったクロロはダメ押しをする。

「許容範囲ギリギリといったところか、単純な威力ならこれだな。爆裂呪文・バーストロンド！！」

フェイタンが死ぬギリギリでクロロはページを捲くり、真人の背後から巨大な火球をぶつける。その熱量はフェイタンのに劣る物の決定打には違いなかった。

限界を超えた真人は炎に包まれる。



## 決戦 シンプルな攻撃ほど効く（後書き）

ウヴオーは勇次郎＋オーラな感じです。永遠に成長期なウヴオー、きつと強者と戦い続けたら最強になるんじゃないですかね。

はい19話です。連投終了のお知らせ、また不定期更新の始まりですよ。

ちなみにコメントして下さるとストーリーを考えるのが楽になって変化が起きますよ？今更いったのはマキオVSウヴオーは絶対にやりたかったからです。

それにしてもエルシャダイがランキング落ちしませんね。・・・実は社員の人が工作してるんですかね？

兄妹がモンハンサードを買みたいなんです、私はPSPを落としてRAN機能が壊れてハブられる予感がびんびんです。

・・・あとは特に書くことはないでうかね。

## 決着（前書き）

ブラッドパドックスはイーノックの能力です。二つ名メーカーをイーノックでやったら出たので採用しました。しかし、今更ながらイーノックを出したことが恥ずかしいです。そして20話です。前回、あとがきに書いたようにネタが無いので、このまま原作はいる前に完結しようと思います。続ける、馬鹿野郎！と罵って貰えば続きも考えますがね。

あとこの作品は多少の原作ブレイクを含みますのであしからず

## 決着

炎に包まれる真人、突然自分の許容を超えた業火に巻かれ、なすべが無かった。冷静さを欠いていた真人はパニック状態に陥り、死の手前まで来ていた。

「役に立たないなあ。しょうがない、私が殺るから下がってよ。」

「ヒューヒュー。」

ポンズが短刀を振るうと炎が消失してしまう。フェイタンを始末した彼女は近くで戦っていた二人が来ているのを確認していた。

「あんたがクロロね、残念だけど此处でゲームオーバーよ。」

「どうかな？（『エピタフ』！なるほどね。）」

青い目を輝かせて一気に急加速するポンズ、対するクロロはペーシを捲り攻撃に備える。

「（貰った！？）」

「位置変換対象は《クロロ》と《投げた石》」

『歪んだ錯綜・ブラッディパラドックス』視認範囲内もしくは特定範囲内の自身に関連があるものに対して効果を及ぼす。位置変換、自身に関連のあるもの同士的位置を交換する。位置変更、自身が視認しているものを視認範囲内で変動させる。

先ほどまでクロロがいたところには小石が浮かび、ポンスの斬撃はその石を割く、さっきの石が転がっていたところにクロロは立ちページを捲る。直立不動、衣擦れの音以外の音はしない。

「（『エピタフ』で未来視をした時、女の短刀を持っていた腕は無くなっていた。未来視は絶対に起こる事柄、俺が何らかの攻撃で女の腕を落としたということだ。しかし俺は今、刃物や何かを切る能力を持っていない、だから他の方法で落とさなければならぬ、女の腕を。あの女は近接に特化しているように見えた、『キングクリムゾン』なら女の実力は無力化できるか。）」

「避けられた！？ならもう一度！（クロロが一瞬で移動した、あれはもしかして原作にあったあの能力かな？でもノブナガのように私ではなくて自分を移動させたのは何故？）」

燃え尽きた森で二人が対峙する。かたや直死の魔眼を持つ近接特化型のポンス、かたや相手の能力を盗み、使いこなすことによって近中遠距離すべてで戦えるオールラウンダーのクロロ。ポンスの攻撃は避けられ、戦法を読まれてしまう。しかしポンスは近距離でしか力を発揮できないので近づかなければならず、逃げるにも先ほどの能力で回り込まれてしまうだろう。

ポンスの頭の中では、クロロの作戦ごと殺すしかないと考え付いていた。

「ふっ！」

一気に近づき、切りかかる。あと少し、あと一メートル。其処まで近づいた。しかし現実は無情である。

「『キングクリームゾン』」

体重を乗せた逆袈裟切りを避け、返しの右薙ぎ払い、手先を狙った切りつけ、急所目掛けた刺突、全て合わせて17の斬撃は虚しく空を切る。

そしてクロロの傍に現れた赤い巨人が手刀を振り下ろす。

ポンズの腕が落ちる、斬るのではなく、力で肉の繊維を捻じ切り引き千切る。盛大に滴る血液、止まることのない勢いにポンズはただ呆然とした。そのあと、膝を付き何とか血を止めようと抑えるも一向に留まることが無い。

「私の腕が…。」

「お前に残された時間は・・・そうだな、あと五分少々かな。まあ、残り少ない時間を楽しむことだな。」

クルリと振り返り、真後ろに居た人物と目が合う。

「あら、ばれちゃった。」

「『キングクリ』っ！」

「おそいつ！」

鮮血が飛び散る、クロロの胸を貫いた腕を抜き、ポンズの方へ歩くマキオ。

唐突な登場、気配を殺し、物陰に潜み、太極拳のようにゆっくりと迫る。

飛ばされた時間の中でも動きは変わらず、近づくチャンスを窺う。



そしてクロロから警戒が無くなる時を見計らい、急接近、死角を通りクロロの背に辿り着く。

「（突かれた！全ての能力の死角を突かれた！どうやって判断したか分からないが完全に読まれていた。『エピタフ』は少し先、十数秒先くらいしか分らず。『キングクリムゾン』は発動までにタイムラグがあり、しかも数秒しか持たない。『ブラッディパラドックス』等他の能力はページ捲らないといけない。完全にしてやられた！）」

「ポンズ、動脈性出血の場合の止血方はこうやって腕を……」

クロロを無視し、ポンズの応急手当をして、どこかに連絡をし始めるマキオ。

「（このまま俺は死んでいくのか！）」

胸に大穴を開け、虚ろな目でマキオを見るクロロ、もはや助からない量の出血をし、もう直ぐに出血死しようとしている。

ポンズは余りの出血でショックを受けていたがマキオに話しかけられ、徐々に平静を取り戻していく。

「（いいのかこのままで！いや駄目だ！俺をやったあの男は絶対に殺す！）」

クロロの目が少しだけ力を取り戻す、冷えていくからだの中で頭だけが沸騰しているかのように熱い。

「『キングクリムゾン』」

最後の力を振り絞る、オーラを滾らせ、能力を発動する。マキオが気づき、ポンズを突き飛ばす。

「『レクイレム』」

クロロも赤い巨人も身じろぎもできなかったが、消え逝く意識の中で確かに力を発揮した。

空間消失、問答無用で範囲内の対象を全て吹き飛ばす。マキオがいたところは地面ごとホッカリと無くなってしまった。この時、マキオという人物は消えてしまった。

旅団との戦いは一応の解決を見る、被害はマキオを除いて少なく、クルタ族の損害は無く、近隣の森の一部が焼け落ちただけという認識だった。

## いつもの日常（前書き）

間髪を入れない連投です。 21話は短めでエピソード的なものです。

## いつもの日常

表にならない、旅団と転生者との戦いが終わり、いつもの日常に戻る。

各々が自分の住処に帰り、安心を得る。一人欠けたことに一抹の違和感を感じながら。アジトに帰り、日々の生活へと戻る。そんな中、アジトに残り戦いに赴かなかったアデルが帰ってきた者たちに問う。

「あれ？スパーはどうしたんだい？一緒に帰ってきていないのかい。」アデルがアジトにすっかり馴染んだシャルナークとマチを引きつれやってきた。

「そういえば、見てないな、メディアは知ってるか？」フランクが答え

「えっ？しりませんよ。ポンスさんは何か聞いてますか？」メディアが困惑し

「そんなことより、マチだっけ？腕をくつつけられない？」ポンスは痛み等でそれどころではなさそうだ。

「御代は貰うよ、でも腕が死んでたら意味無いよ。」マチはスパーの事など知らないのです、そのままスルー

「アイスボックスの中で氷漬けにしておいたよ。」ヒソカがマチに歩み寄る

消えてしまったスパーに疑問を持つも此処はハンター世界、皆比較的ドライなのだ。



モタリケは美人の奥さんの力で発展した会社を必死で支え、それなりに幸せに暮らしている。

ヒソカとポンズは結婚はまだしていないが互いに気の置けない関係になっていて、あとは時間が何とかするだろう。

フランクは何時も通りナンパに出かけ、玉碎しており、メディアは何で自分がメイド服なのか理解できないが、フランクと下ネタを話して楽しくやっている。

アデルは家を継ぎ、とても忙しい毎日を送っているがたまにアジトに足を運んでくる。

マサムネはノブナガや超進化したウヴォーたちを戦いの日々を送っている。

シャルナークなどの元旅団メンバーは今もまだ盗賊家業を送っているそうだ。

だが皆に悲しい報せが舞い込んだ。スパーが見つかったそうだ、傷一つ無い、変死体、何故死んだが分からないそうだ。

しかしそれ以外変わらない毎日、この先も大きな事件があるのだろうか、そんな物は今は関係ない、ただ続いていく毎日を楽しんでいく。



そんなことより、俺転生したみたいなんだよね。薄々、こうなるんじゃないかって思ってたけど、だって俺には奇妙な能力があるから、『先天的魂魄塑性』つまり前世の記憶や経験が具わるといったもので、大してすごい能力じゃないけどな。

俺は所詮凡人、魂だって凡庸なものでね、大体が一般人だったかな。だけどテストは楽だったなあ。でも一人だけ大物がいたんだ、凡人でありながら、強さを求め続けた人物、あまたの天才、奇才、達人、猛者を破り、人生で敗北は一度だけ、地上最強と対峙しながら、勝利を得た人、武に全てを捧げた探求者。

武の体現。『郭海皇』中国拳法の頂点、究極の武、国手。異名は様々ある、まさに超武術家だ。

それにしても漫画の人物が前世だったことにその当時は、驚いたね。彼の歴史は武との歩み、とても常人には真似出来ない代物だよ。才能や身体能力は並程度だったけどね。そんなわけで俺は武術チートがついているんだよ。それで

「にゃ〜、まさか修一が死ぬとは思わなかったにゃ。」

「あああ、邪魔しないでよ。というかこっちに來れたんだね、最上さん。」

「いやだにゃ〜、最上さんだにゃんて、美冬って呼んでにゃ。」

この人（猫）は最上美冬【もがみみふゆ】前世ではいわゆる幼馴染である。なんで猫なのかというと彼女は俺の能力で前世で邪神だったことに気づき、一気にヤバイ存在に成りあがってしまったのだ。



今は猫に分霊（自分の魂の一部）を乗り移させているようだ、前世でもやっていたから、俺でも分かる。

「で最上さん、何か用ですか。」

「修一のいつけつずう」「こつちではマキオといってください」にやゝ言葉に棘があるにや。しょうがない、説明するにや。マキオを此処に巻き込んだのはこの世界や周辺世界を管理している高位精神体にや、それでそいつの力が欲しいから私に協力するにや！」

「べつにいいですけど、そんな人がいるなら俺たちのことは筒抜けなんじゃないの？」

「ふっふーん、情報ブロックするくらいなら楽にや仕事、しかもちょうどいい感じに管理者が逝っちゃってるにや！これは千載一遇の大チャンスにや！」

「なんでそんなことになってるんのさ？というか何故そんなことをしってたんだよ。」

「マキオ、素に戻ってるにや。私はくだけてるのもいいと思うにや、何で知ってるかと言うとなんと実際に管理者を逝かせた人物に聞いたにや、三途で。」

「なんか卑猥だな。」

最上さん……いやモガミを仲間に俺はハンター世界に足を踏み入れた。



さすがに死体は味方になんねえぞ？」

「これでいいのにや、生きてる奴は信用できないのにや。にやつにゃーん、ネクロノミコン！これで復活させてヒトカタにするにや。」

「ここじゃ目立つから、その辺の民家を占拠するか。」

ホントにその辺の民家の住民を縛り上げて軒先に吊るした二人は反魂の儀式に取り掛かった。モガミが怪しげな呪文を唱え、不思議な踊りを踊った。

「（猫が二足歩行でムーンウォークとか見てて面白いな。）」

「にゃーん、これでいい筈にや。にゃにゃにゃ我らが僕よ、起きるにゃー！」

「あつ！はいいい！」ガバッ

## 外伝 極悪の華その一（後書き）

この物語の主人公が裏でどんな動きをしていたか、それが外伝です。

さあ22話です。この外伝が終わったら次の転生をさせます。候補はラジアータストーリーズ、史上最強の弟子ケンイチ、ネギマツ！です。これがいいとか、できるならコレっ！があれば、感想に書いてください。

感想が無く、他に書きたいものができたらそっちにしますんであしからず。

外伝 極悪の華その2

おはこんばんちわ、わたしです。前回、次の話の題材を書いたんですが、特に反応がありません。考えみたんですが、62 / 518 PVも見られている。反応は無い。最近の話は見えていない。皆途中で挫折した。今書いてる話は見られていない。好きにやってよし！ということですね。

ということとは、ということではすよ？いろいろな話を赤裸々に書いても誰も見ていない、自分の部屋みたいな感じですよ？私がおっぱい！とかいっても問題無い、逆にストレス解消でお肌艶々でキャーシユマチャーン状態です。

如何でもいいことですが、マヴカプ3でシュマゴラスがダウンロードキャラクターで出るそうですね。もし、ネット対戦でシュマちゃんに出会ったら手加減してくださいね。

[illegible]

・ ・ ・ また電波が ・ ・ ・

「えつと……あの。」

「にゃん。んんん。」

「ヒイツ！ツてネコちゃんか。」

「ネコじゃないにや！美冬ちゃんにや！」

「わひゃっ！しゃ、喋った！」

そんなことよりも授業中居眠りしてるところを先生に当てられた学生くらいのキョドリっぷりを疲労している女の子を落ち着かせねば

「やあ、お嬢さん、頭の調子は大丈夫かい？」

「にゃ〜、前世とキャラが違うしナチュラルに毒舌にや。」

「黙れ、クソぬこ。」

「・・・前はもつとダルそうでも優しかったにや！」

俺は能力の性もあって、身体に引きづられてるだけなんだからな！ちよつと口が悪いのは此処が殺伐としてから移っただけだからな、キャラが定まっていなかったのかそんなんじゃないんだかね！

「頭ですか？大丈夫だと思いますが・・・もしかしておかしかったですか！？」

「ほら、マキオのせいで余計混乱したにや、粗茶しかないけど、これで落ち着くにや。」

「それこの家にあつた奴だろ。」

「あつありがとうございます！・・・あれ？わたし死にませんでしたか？」

「おい、もがみコイツ記憶が残ってるみたいだぞ。」

「蘇生の儀式は、彼女の身体を元に構成しなおしてるのにや。だから肉体に刻まれた、強い記憶、残留思念、たとえば殺された時の恐怖とかは残ってる場合が多いにや。それに残ってる方が何かと便利にや。」

つまり彼女の肉体を再構成する上で身体を構成する因子として除去しなくても影響が少ないのか。女の子の顔が青褪めて震えてるな、かなりのトラウマみたいだ、やっぱり除いたほうが良かったんじゃないか？

「ほらマキ才抱きしめてやるにや。」

「・・・もしかして、分かってやってたのか？」

「儀式を行ったのはわたしにや、さあさあ彼女に楔を早く打ち込むにや。」

うわあ、なんて悪い奴なんだ。これって洗脳だろ？まあ、顔とか結構可愛いから役得ちゃあそうなのかな？

「やつ！放して！いやああああ！！！」

「（優しく、丁寧に赤ちゃんを抱くようにしっかりと抱きしめる。）」

「うつうつうつ、ぐずつ、やめって、くだつさいつ。」

「落ち着いて、俺はそんなことしないよ。（優しく諭すように話しかける。）」

「落ち着いたら、その血とか精液とか洗ってあげてにや。私はその子の服を探してくるにやあ。」

そういつて、もがみはどこかにいった。たぶん何処かの家から盗んでくるんだろうが、二足歩行のネコは違和感がすごいぞ。

それから彼女、スパーをフロに入れて話をした。えっ？洗ってって頼まれてたって？まあ、一緒に入っても良かったんだけど、ほら言うじゃないかYESロリータNOタッチってね。ロリコンは犯罪者ではない！ペドフェリアが悪いんだ！

はあはあ、ふう。失礼、ちょっと興奮してしまった。えーっと彼女の説明をするよ、彼女は転生前はOLをやってたんだって、覚えてるかな？バスに乗り合わせた女性、それがスパーだったんだよ。彼女はスラムの母子家庭のこに転生してそれなりに幸せに暮らしてたんだってさ。ハンターハンターのことは、全然知らなかったそうだよ。

「にやはくん、もってきたにや〜。」

「おかえり（手が赤いな、鉄臭いから血かな？）」

「最上さん、お帰りなさい。」

「にゃん、最上じゃなくてもがみんでも美冬さまでもみーちゃんでも好きに呼んでいいにや、そんでにや、コレを着るにや！」



「ありがとうございます！」

「にゃにゃ、それでマキオは今どこに住んでるにゃ？」

「原作で幻影旅団がアジトにしてた所。」

「・・・いいのにな？ 奴らが来たらどうするにゃ？」

「クロロを殺して、追いついたら大丈夫じゃないか？」

「にゃ、やっぱり思考が過激になってるにゃん。でもカッコいいからそれでいいにゃん。たまに前の口調に戻るけどにゃ。」

「ん、何十人の記憶があるからな。それはどうしようもないんだが・・・血を嘗め取るぬこか・・・なんか怖いな、タオル渡したらそっちで拭いてくれるかな？ おお、拭いてる拭いてる、可愛いなちくしょう。」

「あの、幻影旅団ってなんですか？ なんか怖そうな感じはするんですけど・・・。」

「強盗集団、しかも警察どころか、世界を牛耳るマフィアでもビビルくらい強い。」

「にゃ、全員高位の念能力者でバランスがいいから、チームを組まれたら神様でも殺しかねないにゃ。しかも神出鬼没で団長の欲望の赴くままに獲物を狩っていく殺人集団にゃ。気をつけるにゃ、レアな能力とか貴重な物を持ってたら直ぐ来るにゃ！」

「・・・。」  
「ぶるぶるっ」

脅しすぎたか？まあ、警戒しておいて損はないかな。さてそろそろ戻るとしますか！マイホームにな！

「じゃあそろそろ行くぞ。」

「そうだにや！」

「さようなら？」

「お前も来るんだよ。」

「えっ！なんでですか！？」

「あと君はマキオも恋人ポジションにやから。」

「それってどうゆうことですか！ちょっとちょっと引っ張らないでくださいよ～～！」

さてと仲間も手に入ったし、スパーを鍛えたらハンター試験でも受けるかな？それより天空闘技場で金稼ぎか・・・まあ、さっさとヨークシンに戻ってゆっくりしようかな？

外伝 極悪の華その2（後書き）

はい、23話でした。どうでもいいことですが、今日は新六部衆デッキにぼこぼこにされてしまいました。いやー、あの展開力はすさまじいですね。二回やっただんですが、二回ともワンターンキルですよ。俺のレプティレスデッキが・・・こっちも強化されませんか？遊星デッキには勝てるんですが・・・話は変わりますが、1日一回更新してる人いるでしょう？あれってすごいですよね。わたしだったら、直ぐにネタに詰まってペースダウンですよ。尊敬しますね・・・あとはエルシャダイの人氣がまだまだ衰えませんか。そろそろ下火になってくれないと困ります。買えないじゃないですか！私が！

外伝 極悪の華その3

最近の水樹奈々さんとか平野綾さんがすごいですね、いろんな意味で。でも声だと宮村さんが一番好きですけどね。エヴァのアスカ、ベルセルクのキヤスカ、DODのフェアリーが特にいいですね。全部違った感じで胸厚すぎますね。

どうでもいいことですが読み切り版ベルセルクのヒロインが私的にナイスです。えっ？知らない・・・ネギまのエヴァに似てますよ。

[illegible]

くくヨークシンの外れ、ブレス社工業地区、少し昔は工業団地として多くの人が住んでいた。しかしブレス社の起こした汚職の数々が明るみに出て倒産してから一気に住民がいなくなって場所ですでには浮浪者が住み着いているらしい。

「ここが旅団のアジトなんですか？」

「予定だけどな、まあ先にこつちが住んでしまえばあつちも他に行くと思うし（ヨークシンにはこういうところが多いからな。）あ」とこの辺の浮浪者には部外者の侵入報告や不審人物の監視とか情報収集をしてもらつてゐるから、みふゆ！見かけても殺すんじゃないぞ。

「はいはい、わかったにゃー。」

何棟もある廃ビル群から状態がいい4階建てのビルを目指す。崩れてしまったビルやそのビルの瓦礫、ツタが伸び、苔が生えたビルや円状の空き地を囲むように建っているビルを越えて、目的のビルはかなり奥まった所に建っていた。

「どツ土足で入るんですか!？」

「ああ、埃とかゴミで汚いし、ビルだから靴のままじゃないと違和感があるだろう?」

「確かに汚いですね………だったら、掃除しようよ!」

「頑張れよ。」「ガンバにゃん。」

「手伝って下さいよ!」

スパーは必死にマキオを説得した。それはもう熱心に、思わずマキオが折れてしまうほどに。スパーにより、靴を脱いだ開放感を感じたい、日本人だったから畳の素晴らしさを忘れたくない、キッチンが欲しい、トイレを完備してくれ、テレビやらゲーム、パソコンの必要性、ベットやクローゼット、タンス、デスクなど家具の重要性について数時間に及ぶ熱弁をされてしまった。

「ジェバンニ（浮浪者）に頼んどいたから、終わるまで天空闘技場で修行するから。」

「……（ジェバンニ?）いつてらっしゃい。」

「スパ―、お前の修行だから。」

「うっ嘘！？そんなこと聞いてないですよ！」

「今言った。みゆきへ行くぞ。」

「（ジェバンニ……一晩でやってくれそうだなや。）」

[illegible]

〃〃 天空闘技場、世界中の格闘家や腕自慢が集まる超高層タワー型競技場、上に行くごとに強者が集う修羅の螺旋になっている。200階からは念能力という特殊技能を持つ物の戦いになる。そしてフロアマスターになったものには、自分の道場を開くことが出来る特典や豪華賞品、さらに高度1000メートル以上の別荘が与えられる。

・・・疑問に思ったんだが、念能力は秘匿されてるんじゃないのか？念能力でのバトルは一般人には見えないから面白くないんじゃない？200階選手の割には体術弱くねえ？とかは気にしてはいけな  
い、きっと何か理由があるのだろう。

「天空闘技場よ！私は帰ってきた！」

「あれー？マキオさんはここに来たことがあるんですか？」

「やっぱりハンター世界序盤の稼ぎ場所はここだよ。ここなら2

00階にいったら自動的に念能力を覚えられるし、金も入る、まさに聖地だね。」

「・・・念能力を覚えるってどうするんですか？」

「念能力でばこられる、大体の人は再起不能になります。」

「ちよつとまったああああ！！無理！無理です、死んじやいますよ・・・・・・・・。」

「ちよつと痛いだけだよ、クフフ。」

「さつき再起不能っていつてましたよね！イタツ！ちよつ！引つ張らないで！」

「（にゃ〜、いい顔してるニヤー、二人共楽しそうだなにゃ。）」

天空闘技場に乗り込んだ二人と一匹、スパーが受付するために汗臭い面々と並び、耐えていた頃、マキオは何気にフロアマスターだったためにファンに囲まれていた。

途中ウイング達とであったり、ラヴコメっぽいのが起きた気がしたがそんなことは無かったぜ。スパーが上り始めて3ヶ月、やっと30階まで上がった。

「おお、スパーの右ハイキックが相手の側頭部にきまつたみたいだ。」

「うちのウイングもかなりやるさ。」

「そろそろ、念を起こしてやっても大丈夫だと思うんだが、どうだ？」

「んー元々、暇つぶしに鍛えてたから、まあ潰れてもいいわさ。どっちの弟子が先に200階に辿り着くか勝負するかい？」

「クフフ、100万ジェニー賭けよう！」

「うふふふ、負けないよ。」

「（二人共、ご愁傷様だにや・・・。）」

ウイングを暇つぶし（ハンターに成りたての人が念に気づいて教団に相談したら会長からじきじきに命令され、高位の念能力者が指導しなければならぬ）に弟子にして威力偵察に天空闘技場に出場させ、賞金はネコババしていたビスケットとマキオは話が弾み、よく賭けをするようになっていた。

「じゃあ、念を起こすから其処に立つて。」

「ええっ！行き成り何なんですか！」

「あたしらも念を起こすだわさ。」

「えっ！師匠、ゆっくり起こすって言ってた「ほい！」あつ、すごい身体が光ってるもやが「それ留めないと死ぬから。」うおおおおお！！！！とまれーーーー！！！！」

なんとか纏（身体にオーラを留める技術だにや）をすることができ、3日ほど寝込んだ、スパーとウイング彼らに幸せが訪れるのだ



ろつか？そして自重という言葉を彼方に置いてきたビスケとマキオはさらにどんな騒動を引き起こすのか！？

次回、他人の不幸は蜜の味だにや！そろそろ出番が欲しいにや！の二本立てです。（嘘）

外伝 極悪の華その3（後書き）

はい24話です。いやーなんかムカつくやつって何処にでもいるんですね。謝りに来たくせにガム食いながら足組んで「謝りに来た」ですよ。ふざけてますよ、うん、買いましたけどね、喧嘩・・・手首痛めました。

そんなことより相変わらず中身が薄いです。ビスケの口調も分かつ、ウイングのキャラも崩壊気味で自分の文才の無さに思わず、泣きたくになります。

外伝 極悪の華その4

ジョンウン、すごい刈上げですね。タラちゃんみたいで、ええ。

隴村正の料理って美味しそうですね。紺菊さん綺麗です。

[illegible]

天空闘技場200階、そこは念能力者の巣窟。ハンターライセンスを持たない、アマチュアが集う戦いの祭典。才能で目覚めた天然型能力者ではなく、先輩ハンターに師事し、たゆまぬ努力でえた養殖型ではなく、戦いの只中で研磨される修羅の道、さながら蟲毒の壺のように強い物だけが生き残ることができる。

「さあ！ やって参りました。バトルオリンピックアチャンピオンシップ、二年に一度の大一番！ 全世界最強を決める戦いの火蓋が幕をきるうとしています！」

西と書かれた入り口からやってきた大柄な男、ぶ厚い甲冑に身を包み、その手には長大な大剣、剣と言うにはそれは、余りにも大きく、ぶ厚く、重く、大雑把すぎた、それは鉄塊だった。全身黒尽くめの大男がリングに上がってきた。

『西方からやつて参りましたのは、今一番乗りに乗っています。ボイド選手！破竹の勢いでフロアマスターになつた彼は天空闘技場に来てから僅か2年でここまで這い上がってきました。これは天空

闘技場最速記録でございます！その巨体に見合わない速さ、その手に持つ大剣でことごとく対戦相手を屠り然る姿はまさに人間風車！彼はどんな戦いを見せてくれるんでしょうか！』

対して東と書かれた入り口からやってきたのは細身の男、羽織に袴、黒い髪を後ろで結い、観客に手を振る選手。素朴な顔立ちで人好きする笑みを浮かべた優男がゆっくりとリングに上がってくる。

『前回、前々回のバトルオリンピアの覇者！私達は見てきた彼が成し遂げた偉業を！天空闘技場史上最も激しかったあのトーナメントを！新人の彼が次々と優勝候補たちを退け、歴戦の猛者！オリンピア覇者！伝説の達人を打ち破った姿を！私達の目には焼きついてます。250階のフロアマスター、マキオ選手がリングに帰ってきました！』

鳴り響く歓声、観客の声が怒号となり、一つの渦となす。

『さあ今ゴングが「オラアアア！」ボイド選手がゴングを待たないでできりかかるう！』

会場に轟音が響く、ボイドがいきなりの切り下ろし。

「クフフ、堅の練りが甘いよ。」

『搦んでいるうー！あの大剣を片手で搦んだというのか！マキオ選手の足元が砕けてるのが分かるように相当な力で振り落としたのが分かります！』

「まだまだ修練が足りないね。教えてやろう！コレがオーラの使い方だ！」

「ウオオリヤアアア！！！」

「貧弱！貧弱う！」

『ボイド選手構わずラツシュをするが！すごいすごいぞ！マキオ選手！ボイド選手のボイド選手の斬撃を全て殴り飛ばしています！』

「コレでも喰らえええー！」

『ボイド選手の大技！破軍粉碎波です！幾多の敵を打ち倒した飛ぶ斬撃が爆風と共にマキオ選手に襲い掛かる！』

「オーラの練りが足りないし、収束も甘い、何より大雑把だ！」

『マキオ選手から放たれた一筋の衝撃！これは百歩神拳だ！そうです、マキオ選手にはこれがある！飛び道具を貫く一撃が！ボイド選手の大剣を砕きました！』

「チクシヨウ！負けられるかあああ！」

『コレはボイド選手の切り札！黒の鎧です！この状態になると我々の目では追いきれません！』

「ボイド、今度やる時もっと強くなれよ！これが俺の武の真骨頂！」

かつて史上最強に挑んだ男がいた、最終兵器と呼ばれた男の編み出した奥義、当てない打撃、想像によって全身に関節を増やし、その関節で加速させた拳で一撃。



「あつ、ピーマンが安い・・・ピーマンの肉詰めもいいかも、おじさん！」

「えつ、はいはい、いらつしゃい。おー、スパーちゃんじゃないか！旦那さん元気かい？今日、試合みたいだけど。」

「旦那さんだなんて、えへへ、へっ？しあい？」

「あれ？知らないのか、今日はバトルオリンピックの最後を飾る最強の挑戦者と今のタイトルホルダーのマキオの試合が午後9時からあつて、みんな心待ちにしてるんだよ！まあ、チケットはべらぼうに高いからオジサンはテレビで見るけどね。」

天空闘技場250階、フロアマスターであるマキオの部屋である。

「wwwうはwwwやべえwwwウイングwww腕相撲強すぎwwwワロタwww」

「大丈夫ですか？」

「だらしないねえ、それでもチャンピオンなのかい？」

部屋で寛いでいた、マキオ、ウイング、ビスケ、みゆきは腕相撲でプリン争奪戦をしていた。結果はマキオの惨敗、ネコのみゆきにさえ負けてしまうという体たらくを披露していた。

「ちよつと！マキオさん！今日試合だなんてなんで黙ってたんですか！」





「そろそろ始まりますね。」

「出で来たね、このボイドって奴、試合で見たけど、かなりみた  
いだわ。」

「そうなんですか？あつまキオさんですよ・・・すごい人気です  
ね。」

「それもそうわさ、ここでマキオのこと知らないなんてモグリ確  
定・・・おお、気合入ってるね、不意打ちだわさ。」

『掴んでいるうー！あの大剣を片手で掴んだというのか！マキ  
オ選手の足元が砕けてるのが分かるように相当な力で振り落とした  
のが分かります！』

「まつまキオさん！・・・ふう間一髪ですね！」

「いやいや、余裕で避けていたよ。」

「えっ、でも掴んでますよ？」

「あれは一回落ちたのを拾ったのさ、マキオの筋力とオーラじゃ、  
相手の馬鹿オーラを打て止めるのは不可能に近いさ。」

『ボイド選手構わずラッシュをするが！すごいすごいぞ！マキオ  
選手！ボイド選手のボイド選手の斬撃を全て殴り飛ばしています！』

「へー、あつすごいですよ、ほら！ちゃんと止められるじゃない  
ですか。」

「違うわさ、あれは相手が動揺してオーラが乱れて上手く周が出来ていないから、かるうじて硬で弾くことが出来ただけだわさ。」

『ボイド選手の大技！破軍粉碎波です！幾多の敵を打ち倒した飛ぶ斬撃が爆風と共にマキオ選手に襲い掛かる！』『マキオ選手から放たれた一筋の衝撃！これは百歩神拳だ！そうです、マキオ選手にはこれがある！飛び道具を貫く一撃が！ボイド選手の大剣を砕きました！』

「これもさつきと同じで相手のオーラが薄いところを上手く収束したオーラで貫通しただけだわ。」

「ほえ〜、よく見てるんですね。」

「・・・この子はホントに心配だわさ。」

『これはボイド選手の切り札！黒の鎧です！この状態になると我々の目では追いきれません！』

「ああ、コレは不味いね。自分のリミッターを外すことで強引に倒しに来たね。」

「速くて、目で追えませんよ。」

「これは負けたかな？《ツツ——————！！！！！！！！！！》耳が・・・。」

「うっ、耳がキーンとします。」

「試合はどうなったんだわ？」

『えっーと、いま画像が乱れているんですが・・・写りましたね。ボイド選手が倒れているということは・・・勝者はマキオ選手だー  
――！！！！』

「良く分かりませんでしたね・・・あとで直接聞きましょうか？」

「そうだね・・・。」

## 外伝 極悪の華その4（後書き）

唐突にバトルパート、しばらくはバトルなさそうなんで無理に入れました。マキオの身体能力は一般人ぐらいです、周りのメンバーは人外レベルの身体能力です。ハンター世界ですから・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5631n/>

---

転生人生 【極悪ノ道化】

2010年12月4日19時44分発行